

88

農林統計時報

昭和六年三月發行

第二號

目次

時代の推移に伴ふ統計の必要を痛論す	四
統計と社會經濟學(上)	七
米の收量と價格との關係	一〇
率勢米價の話	一三
統計の現状と將來	一四
諸外國收穫播種狀況	一六
統計速報(府縣別)——米・繭・鶏・鶯	一八
昭和五年農産物價額減少調	二〇
新刊紹介	二二
消息	二六
寄贈圖書	二七
重要農林經濟統計	三〇

寄贈

6.7.15

農林省圖書館

林大臣官房統計課

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



時代の推移に伴ふ統計の必要を痛論す

農林省統計課長 鈴木覺四郎

滔々たる社會の風潮は或は螺旋的に廻る小車の如く、或は過ぎ去り過ぎ行く流水の如く、而して又新なる年は新なる月と共に變轉極まりなく招徠す。昭和五年度の統計界は國際經濟統計會議、國勢調査、勞働調査の實施等實に目狂るしく過ぎ去つたのであるが一面世界經濟の動きは或は直接に或は間接に我國國民經濟を脅かし、而も又我が國特有の經濟事情は或は峻酷に或は執拗に我國國民經濟の根底を搖す所あり、一つの事業を完成し先づ一憩みと息繼ぐ暇もなきは全く全國十數萬の統計關係者のみに限らない次第であつて、今や我も人も一面に於ては國家、道府縣、市町村財政經濟の逼迫と打開に悩み他面に於ては自家經濟生活の行詰と合理化に向つて日も尙足らざるの状態、之當に現下の峻酷なる經濟事情であると云はなければならぬ。人は新らしきを好み新らしき事業の創設を望む。而してあらゆる文物が日に新に月に更るとすれば一九三一年以後の世相に對する透徹せる諸般の準備及計畫が其處に無ければならぬ。而も云ふ迄もなく從來統計の仕事が閑却されて居つた爲に少しく緻密の觀察考究を爲さむとすれば常に其の資料の發見に苦しむこと多く一方あらゆる方面に於て新規に計畫を樹て調査の指針を進むべき必要は眞に緊急なるものが多い。

斯くの如く統計界に於ては今後其の範圍を一層擴張し社會經濟の事情を明に正しく描出しなければならぬことの甚だ切なるものがあるのであるが、現下の中央政府及地方に於ける財政事情は之を許さず、折角の農業調査中經營、生産、家畜調査も未だ實現を見ないので産業經營調査、各種生産物の在庫、流通、消費に關する統計等各種經濟價格並一般産業界の指導統制の爲の新らしき資料の作製の希望も一頓座を來し或意味に於て統計事業行詰まれるやの感なきを得ない。

然しながら此處に吾人の深く意を用ひなければならぬ點多々存するのである。

近來中央及地方に於ける統計關係者不斷の努力に依りて農林統計等に於ては著るしく其の正確度ははり來りたれども産業統計の至難なる今更暇を要せず、今尙幾多の改善すべき點を包含し、不十分なる諸點多きを遺憾とするのである。今假りに現在丈の統計としても其の内容の整備を要する點又極めて多く、各種農産物、林業物、水産物の生産額中家畜の數字の如き調査擔當者の留意によりて其の正確度を増加せしむべき餘地は甚だ多い。元より何れの統計にしても絶對的正確は到底期することを得ず、殊に産業經濟統計の如きエンゲルスの云ふが如く二〇%前後の誤謬は或は免れざるものなるやも知れないが云ふ迄もなく經濟關係が微妙になればなる程其の誤差は高次的に甚大なる影響を各方面に及ぼすべきが故に特に留意して常に改善に不斷の努力を要するのである。

而も現下の經濟事情を具に通觀するに一般經濟界中特に農村經濟事情の如きは最も逼迫し急速に何等かの打開方法を見出さざるべからず。將又一般農林業に關する今後の重要問題としては農業團體制度、農業保險、農林金融制度、農業水利、農地問題等複雑至難にして而も急速に解決を要するものが極めて多いので農林統計の整備改善は愈々其の領域を擴大せねばならない趨勢にあるのである。

從來統計の仕事は條の下の力持と云はれ考へ方に依れば一面條の下の力持なる所に統計の重大なる意義が存したのであるけれども多數統計關係者の血の滲み出る様な勞苦を以て尙之に報ゆる處極めて少きは眞に遺憾至極の事である。何れの時代に於ても制度の完備は必要とするも結局は之を運用するの人が根幹たるは申す迄もなく殊に統計事業は本來組織的、團體的の事業なるが故に各人の一致協同に依りて益々緊張せなければならぬのである。即ち調査方法の改善其他に依りて從來の統計を整備して緊切なる國家及地方公共團體の施設計畫の資料に誤少からしむると共に經濟生活の合理化、産業經濟界の統制を易からしむることを心掛けねばならぬ。

生活の合理化、産業の統制は單に權力又は財政の力のみに依りて強制せらるゝものとは考へられない。其の資料を整備し内容事情を明にする事が其の第一歩たることを知らねばならぬ。

今や人類は其の社會生活の上に將又其の經濟生活の上に確然大地を踏んで立つべきことを要す。而して其の立つべき地點の情勢を明にし其の占むべき地點を明示するものは即統計であり、之を換言すれば人類と大地との強き聯鎖を形成するものは遂に統計でなければならぬ。敢て目狂ましき時代の推移に伴ひ統計の必要を痛論する所以である。

世界農業センサス消息

萬國農事協會提唱の世界農業「センサス」は一九三〇年から一九三一年にかけて既に施行済のものもあり又現に施行中のものもあるが既に施行済のものは、丁抹、グレートブリテン及北部愛蘭、洪牙利、愛蘭自由國、ラトビア、ルクセンブルグ、諾威、和蘭、瑞典、チエコスロバキア、ジャマイカ、英領ギアナ、トリニダッド及トバゴ、英領北部ボルネオ、セイロン島、馬來群島、レバノン、佛領西亞弗利加、アルゼリヤ、ケニア、ニゼリア、ニアサランド、ニュージランドの二十三ヶ國であり折角施行中のものは獨逸、塊地利、白耳義、フィンランド、佛蘭西、希臘、氷洲島、伊太利、リスアニア、波蘭、ルーマニア、瑞西、加奈陀、合衆國、墨西哥、グアテマラ、アラスカ、ポトリコ、亞爾然丁、ボリビア、智利、ウルガイ、海峽植民地、パレスチナ、埃及、バストランド、ウガンダ、北部ロデツサ、タンガニカ、南亞聯邦、エリトリア、キレナイカの三十二ヶ國である。かくて萬國農事協會では世界の主要國が大體之に参加し其の結果も近々纏め得る見込がいたので昨年十一月の第拾回總會に於て次の如き決議を行つてゐる。

- 一、「センサス」の結果は纏り次第分冊報告書の形式により公表すること
- 二、諸國政府の参考と指導との爲に、各國の調査方法に付き夫々批判的研究を爲すこと
- 三、世界農業「センサス」の結果を利用して、以て食料及原料生産物の國際的生産の研究、並に各國に於ける需要消費の相關々係を明にすること
- 四、以上の任務遂行の爲必要な資金を能ふ限り準備すること
- 五、世界農業「センサス」の結果を利用して、面積、作物、家畜及畜産物に關する統計年報を完成し且協會に對し此等の統計を組織的に通信すべきこと

かくて此の世界劃期的統計調査の案も世界文化の爲に着々貢獻し得る様になるわけである。

統計と社會經濟學 (上)

四

本論は「國民經濟と統計年鑑」一九二九年九月號に掲載せられたるハンス・ユルゲンゼラフイム教授の論文を譯述したるものである。

一、リアリズムと理論

社會經濟學の内部に於ける分裂葛藤は其の今日迄に到達したる發展階段の最も顯著なる特徴の一つである。而もその學說の複雑なる多様性は第十九世紀を支配し居たる主義學派の少くとも行き詰れる状態を示すものである。此の混亂は——全く厄介な問題であるが——依然として純粹理論と實際理論との間に既に古典學派と歴史學派とを分裂せしめた越ゆる事の出来ぬ矛盾を藏してゐる。現代の急速なる發展テンポ、世界戰爭の到る處に醸成した根本的なる變革、最近二、三十年間に於ける私有財産主義制度の内部的變化、ボルシェビキ國家資本主義、此等の總ては前世紀の國民經濟學の形式が現今に於て幾分進歩したりとは云へ既に適用せられ得ずと思はしめる實相である。特に合衆國又は戰前の露西亞に於てさへも我々の學問の若き代表者の間に社會經濟學のより一層現實

性——之は獨逸に於て歴史學派に關聯してマックス・ウェーバー、ゴットホル・オットリリンフェルド、ヘッセ其の他に依つて高唱せられた一の要求であるが——を求めざるが故になつた事は敢て異とするに足らぬ所である。之まで數字的説明と經驗的實際的研究との間に介在して居つた純理論は此處に更に幾派かに分れてあらゆる階級と方向との統計的表現を以てせられる事となつた。

扱此の矛盾を超越し社會經濟思想の統一を成就する事は可能であらうか、此の問題を兎に角一の解決に導く爲には先づ何處に最も深く矛盾が潜んでゐるかを認識する事が必要である。文獻を一瞥すれば理論の中に存する意見の差異は多く方法の相違に歸すべきものであり、又方法そのもの從て又研究の進路は研究の目指す方向に依つて決定せられる。目的は方向を決定する、とは云へ目的決定を茲に萬能的に確保する事

は出来ない。蓋しそれは廣く研究者個々の着眼點に依つて決定せらるべき問題であるからである。社會經濟學が國民の社會經濟生活を何等か適當なる方法に於て發展せしむる高遠なる任務を有すべきか或は孤立的なる空想の完成に慎み深く満足を見出すべきかは學問的に明示し得ない。尤も之は個人的見解の問題であるが茲に又その意見の岐れる争の究極の根幹が存しそれより異論が派生して來るのである。

以下本論の任務とする所は、現實派の理論が可能である事の證明を提出し目的達成の爲に踏破せねばならぬ錯雜したる道を指示するにあらねばならない。それは純理論派の代表者が屢々充分認めてゐるものよりも一層困難なるものである。此の研究は、尙論及せらるべき幾多の問題に鑑れば斷片的なるものであるかも知れないが、抽象論が決して之なくして済まし得るものでもなく又その儘放置せらるべきものでもない事を示すであらう。

統計の組織的構造は、卑見に依れば一の特殊のものでありその本質上特異なる方法であると考へらるるけれども現實派の必然的に達成に努むべき彼の社會經濟理論の現實接近性を

齎し得る事を示さなければならぬ。統計は譬喻を以てすれば濾過器の機能を營むものである、演繹的に得たる概念及繋聯關係が經驗的に利用し得るものとなる爲には先づ統計の濾過器を通過せねばならない。社會經濟學に必須の方法としての統計が上述の役割を引受け得る爲にはその性質も綜合的に即ち一方に於ては充分に經驗的事實の把握を目的とし他方に於ては演繹の上に組織的に組立てられねばならない。統計的研究は勿論抽象的であつて、他の凡ゆる學問的方法と同様事實そのものを把握する事は出来ない。併し乍ら統計はそれが文化科學方面に於ても自然科學に於けると同様利用性のある所に最も大なる意義を有するのである。統計はまた此の方向に於て綜合的であり分裂的である。以下述べんとする最も主要なる任務の一は正しくそれが文化科學方法にも自然科學方法にも共に關聯する事を證明せんとする事である。

我々の議論の出發點は「理論」と「事實」の概念であるが先づ第一に此の兩者の關係を明かにするの必要がある、而してその本質的關係に就ては既にアー・ヘッセが論及してゐるがそれに依れば、科學は「其は何物であるか、何が故である

か、又一定の方法より如何なる結果が齎されるかを示すものである。科學は原因を探究し結果を研究し實際の經驗的原則の取得に依つてその推論及反對結論に基礎を與へねばならない、此等は事實たる事を要する。總ての經濟政策は事實及其上に作用せらるべき因果關係に關する正確なる認識を必要とし又同時に計畫せられたる方策より齎さるべき結果に對する判斷を必要とする。勿論科學はその存在に缺く可からざるものとして脈動せる生活上經驗對象を伴ふ事が必要である。研究にして研究そのものを目的とするものでないものは窮極に於て再び事實に歸着し得る爲には即ちそれが事實に適用し得るものである爲には實驗又は經驗に依り得たる資料より出發せねばならない。出發點と目的地の間に廣がる道程こそ科學が事實より遠ざからんとする隔離である。科學は經驗對象をその認識目的に送り上げる、而してその本質は抽象的である。科學が此の種の思考の経路に向ふ時はそれに依つてのみ經驗に於て得られたる多様性は單純化せられ思慮深く加工せられ得る。理論は一定の前提に於てのみ現實性を有する。即ちその認識目標を事實の中に求むる事が出來、具體的現象を

視野の中に有しそれより出發し、若しくは轉ずる限り事實の認識に必要な一般原則を取得する爲必要なる時及殊に何時にても事實へ復歸の途が可能である時にのみ現實性を有し得る。此の現實への復歸の可能性こそ大に肝要なのである。

思想的に單純化せらるればする程、又かくの如くにして得たる決定が經驗的價值を有する事少き程、歸路を見出す可能性が遮られるであらう。

理論的思索に求めらるゝ事實接近性は既示の如く、以下試みらるべき研究たる統計思想との結合に依つて且又マックス・ウェーバーの説きたる若干方法上の根本原則に基いて達せらるゝのである。かくて更に統計の論理的本質を従來見たる以上に一層正確に了解し社會經濟學者にとつて問題となれる爾餘の方法中に占むる統計方法の地位を確定し最後に現今絶えず多方面に要求せられてゐる問題たる「社會經濟學の統計化」が如何なる意味に於て考へ得らるゝかの問題を明かにし得るに至る。

併し乍ら社會經濟方法論中に一層廣い範圍に統計的研究方法を容るゝ爲には統計が方法なりや科學なりやの論争に對し

決定を與ふる事を可とするであらう。之が爲此の際取急ぎ先づ何が社會經濟學を獨立科學に迄引上ぐるかを考究する必要がある。

二、社會經濟學と統計との科學的本質

總ての科學は經驗的事件より出發し、經驗目的に依つて認識目的を形成する、而して前者は後者の前提である。かくて認識目的は一定の視角の下に一の統一せられたる問題提出に基いて觀察せられ、觀察者に本質的に映じたるものから得られたる經驗對象であると云ふ事が出來る、茲に又抽出原則の見出さるゝ基本となる決定的なる認識目標があるのである。他方科學の限界其のものを定める爲には一定の研究方法のみが採用せらるゝと云ふ事は左程重大でもない。例へば自然科學者は實驗と共に統計的大量觀察方法を利用し得るが同様に文化科學者も演繹、歸納及統計方法を個々に又は綜合的に利用し得るのである。

社會經濟學に於ては此の精神上の統一的方法は次の如き結果を齎す、即ち日常生活に於て人が田畑に、帳場に、工場に働き財を生産するを見、又交通運輸の設備を觀察する、又經

濟行爲が行はるゝ組織形態を認識し、價值構成其の他の多くの現象、約言すれば經驗目的を表現する幾多の雜多なる現象を認識する事が出來る。我々は多様性を指導的根本思想に還元する事によつて代表性及普遍性を現出せしめんとし、かくてマックス・ウェーバーが次の如き言葉によつて描出したる認識目的に到達する、「我々の肉體的存在は我々の最も觀念的なる欲望充足と同様に常にそれが爲外部的手段を必要とする數量的有限性及質的不足の上に動搖してゐる、從てその充足の爲には計畫的なる用心と努力、自然との闘争、他人との團結即ち出來る丈正確に示せば總ての、我々が廣い意味に於て社會經濟的と名付くる現象の生れ出づる根本的事實を必要とする、我々は此の思想を又次の如く換言し得る、即ち經驗目的の觀察せらるゝ視角は稀少性の組織的克服である」と。

經驗資料を構成する外界の現象はそれ自身社會經濟的性質を有しないとマックス・ウェーバーが指摘せるは妥當である。此の「社會經濟的なる」形容はその儘それに適合せられず、僅かに認識的興味の方向がそれをかくあらしめるのである。例へば貸財生産過程の如きは技術的、私經濟的、社會經

濟的又は藝術的立場に於てさへも觀察せられ又科學的意味をも有し得るのである。

社會經濟學の見地をとれば直ちに第二の問題即ち事件の文化的意義如何の問題が起つて来る、更に又その文化的意義が本質的に社會經濟的に重要性を有する事件を研究する事が必要なるのみならず、かゝる經濟的に重要な現象にして社會經濟的視角の下に重要な結果を生ずるもの及び經濟的な拘束を受くる現象即ち其の點に於て社會經濟的動機によつて左右せらるるものを顧慮する問題が惹起せられる。

約言すれば社會經濟學の認識目的は社會現象及文化過程の經濟的規律及影響の問題であると云ふ事が出来る。

此の事實經驗に一致する解釋については一般に毫も異論を見ない、純粹理論の代表者達は屢々最早や經驗目的の典型的特質を包含しない認識目的を形成する傾がある。例へば塊地利學派の或代表者の如きも經濟を直ちに國民經濟學の對象としてゐるが如き之である。經濟が必然的に社會經濟であるとする事は取るに足ぬらとして顧慮せられて居らない。最近ロバート・リーフマンが目的決定を提唱してゐるがそれは經

濟對象の任意的單純化を意味する。氏に従へば抽出原則とは經濟主體に就ての心理的考慮即ちその效用と出費との比較對照である。かくの如き考へ方は論理的には可能であるが併しリーフマンの經濟心理説を以てしては社會經濟學者にとつて本質的な問題を明かにする事が出来ない。蓋し經濟目的の活動せる多様性からは殆んど何物も残らないのである。

總ての上述の目的決定の外——枚擧すれば幾らでもあるが——總ての現實派理論の主たる要求は經濟的事實より出發し出来るだけそれより遠去かり而してかまはず研究の結果をそれを利用してする事である。

以上の所論は統計の本質を何れかの方向に明示する助けとなる武器を我々の手に與ふるものである。通説は統計を或は方法であるとし或は獨立科學であるとし、又社會經濟學の見地よりは準科學又は補助學なりと認めてゐる、茲に二、三その名を擧げればツアーン、ジーゼク、フォン・マイアー、ヘツセ等がある。統計に課せられたる二重の役割はその方法的特殊性を蔽ふに最も適してゐる、それ故それを一義的に決定し、その論理的本質に従ひ科學の領域内に占むべきその位置

を明示する事が可能なりや否やは問題である。一の批判的說明は爾來統計の雙生的本質を示す爲に引用せられた證據と共に恐らく此の論争を明白ならしむるに役立つであらう。

社會的及經濟的生活が問題となる限り、ヘツセはその名著に於て次の如く述べてゐる。「即ち統計はその主たる領域に於て獨立の科學的規律を構成するものであり而して其の規律は特殊の方法的特性を以て、社會經濟現象の物質的説明を提出するものである。諸現象の研究が一の科學となるは、それが唯一定の資料領域のみを支配するが爲にあらすして、その考察が一種獨特であり、統一的に思惟せられ組織的に完成せられるからである。統計の科學的特殊性はそれが獨特の研究結果に到達するその方法の獨自性と隔離性によつて規定せられるのである」と。此の解釋は社會經濟學の目的決定に依つて得られたる推論に基いて反對せられねばならない、蓋し研究技術上の意味に於ける觀察及處置の方法が獨立科學としての資格を與ふるものでなく、寧ろ經驗目的より得られたる認識目的の統一性、特殊性即ち又經驗對象が考察せられる所の觀察點及問題提出こそ、その資格を與へるものである。

統計は専らその固有の經驗目的を立證する場合に於てのみ始めて獨立の科學たり得るのであるが實に此の如き事を見出すべく、研究は再三再四企圖せられたのである。併し又認識論的には最近ウォルフ教授が分類してゐる如く、それが靜態的科學として解せらるゝか又は動態的性質を有する科學として解せらるゝかと云ふが如き事は全く重要でない。此等兩者の場合に於て重點は限られたる研究目的の範圍限定に存するわけである。此の關係についてはエル・フォン・モール、ワボイス、ハウスホーファー等は寧ろ一樣に統計を國家及社會の狀態に關する科學又は(上述の)人的及國家的組織の大量及その活動並に法則に關する科學として説明すべきであると云ふてゐる。統計の獨立科學たる事をその固有なる研究領域に依つて證明する試みは成功したものとは認め得ない、一般に統計の對象として主張せらるゝ國家的及社會的狀態は——高調さるべき所であるが——一の經驗目的に過ぎない、固よりそれを種々の觀點より學問的に處理する事は可能である。而して採用せらるゝ抽出原則に依つて種々なる認識對象は獨立科學の基礎を構成するに至るのである。然し乍ら専ら統計的性

質を有する抽出原則は上記の學者に依つてその存在が否定せられてゐる。

此點に於て獨り独自の立場にあるゲー・フォン・マイアーのみは此の方向に研究を企てたのである。氏の下したる定義に依れば、科學としての統計は統計的に集積せられたる社會大量を以て之を表現し得る限り社會的人間生活状態及現象の統計的資料の基礎の上に築かれたる説明であり又經驗目的たる社會状態を特殊の觀點即大量解析の觀點より前景に明にしたものである。併し乍らフォン・マイアーの研究は二つの方向に於て充分ではない。大量解析は統計方法の今一つの表現に過ぎない、故に此の定義もその固有の方法に依つて統計が一の獨立科學であるとする既に辯駁したる説明に復歸するものである。他方統計を社會大量に制限する事は一の循環論法を意味する事となる、何となれば第一に個體の連鎖から又は多くの單位の關聯から成立する大量現象なるものが社會現象の本質であるからである、それ故に又社會状態の把握に關して統計に固有なる同一原則は決して存在しないのである。

又統計の根本的研究の論理的誘導に於て例へばウオルフの

之に對し何故に健全なる常識が反對せんとするものであるかを了解し得ない。統計學が一の獨立科學なりとする論争は又少くとも一部分他の理由をもつ。人間は自己に奉仕する下婢に對して、彼女の輕侮と貶黜とを恐れそれ故に、又その科學的價値の減少を恐れる、恰も統計の意義がその公的地位から落ちるかゝの如く。

三、社會經濟研究の經驗的出發點

總て事實に近き理論は總ての場合に於てその出發點として經驗を選ばねばならない。その結果先づ最初にその研究に充分満足を與へる爲には如何に研究上處置すべきか、演繹か、歸納か、統計方法か、何れがその要求に最も適するかの問題が起るのである。

一般的前提より特殊を誘導せんとする演繹方法は一般に従來の理論的社會的經濟研究に行はれてゐたのであるが、それは次に述ぶる歸納方法が社會經濟生活の方面に於て困難なる爲過去に於て又現在に於ても尙多く「演繹こそ之を利用して好果を收め得るものであつて即或一般的前提より出發して社會經濟關係の單純化せられたる形態が構成せらるべきであ

なしたるが如く統計を此の領域にのみ限る事は統計方法の慣行的取扱に反するものであつて此の如き取扱は全くの專斷である。組織的なる統計的大量觀察は他の領域に於ても著しき程度にその利用を見出すのである、人類學、言語學、心理學、物理學、氣象學等——此等は二、三の例を抽出したるに過ぎないが——も亦統計方法を利用してゐる。統計を社會的大量現象にのみ限る事は何等明白なる理由がない。併し統計研究が總ての計數的に把握し得る大量現象に無限に利用し得るとなすは統一的なる認識目的に依存する假設統計の幻影を破壊する。國家的、團體的、社會的及經濟的生活現象及氣象學、心理學、物理學其他多くの現象が集合して或る無秩序なる混合物より個々の思惟目的を誘導するが如きは想像出來ない。然らば通説的なる論理學のなす如く統一的認識目的を科學の獨立性に決定的のものとして承認するものは統計を唯一の方法として認めねばならない。尙他の場合に可能なる結論が屢特殊なる事を強要する。かゝる状態の下に於てはゲー・フォン・マイアーが述べたる如く、漸くにして得たる統計的集合智識のかくの如き破壊が一の認識論的社會學的暴力であつて

一との信念が保持せられてゐる。通説の特質はその抽象化されたる性質にあるのではなくて寧ろ抽象と演繹との結合にある、蓋し總ての理論は抽象的であるから。シミアンも其のフランス語翻譯版に於ては大分かかる融合に傾いて居る。氏は演繹的研究の出發點たる前提はその一般的根據に於て事實上支持し得ないか或は具體的には極めて僅かしか支持し得ない爲、それより何等有效なる換言すれば實際上利用し得る結論を誘導し得ない事を證明してゐる。而して演繹方法に基いて獲得せられたる理論の大部分が事實を明示せんと努力し而もその本質に於て純粹演繹方法を表現せずして心理的又は皮相なる經濟的性質を有する最も不完全にして偶然的な事實觀察に依るが故に寧ろ現實的研究の見地よりしてそれに對して重要な願慮が提起せらねばならない事を明かにしてゐる。かくて社會經濟學に於ける演繹的思索が拒否せられるといふよりも寧ろ一層懷疑的な經驗的基礎が必要となつて來る。一般的命題は現實過程の知識の上に基礎を置くものであるから、漠然たる經驗事實の上に立たしめず寧ろ之を組織的に觀察し一層深い研究任務中に置かなければならぬ事は研究

者の責務である。

而して歸納法が此の問題を解決し得るとは一般に云はれる所であつて、個々のもの特殊のものより一般的にして而も法則的なる從て經驗的なる結論を結ぶべき方法をとらんとするものである。それは自然科学の事例が示す範圍に於ては現實派理論の要求に應ずるものである。然し乍ら文化科學の範圍内に於ては、その利用範圍は制限せらる、蓋し歸納的結論は問題となれる現象の同種性及不變性を前提としてゐるが此等は社會經濟に於ては如何なる場合に於ても制限的で寧ろ單に例外的に實現するのみであるからである。かくの如く直接現實現象の觀察に基礎を置く所に統計方法の特性が存する。社會現象の大部分が統計的把握に依つてのみ一層深き科學的闡明を通俗化し得とする説明には異論を樹つるを得ない。統計は社會經濟學者をして速やかに資料を自由に使用し得しむるのである。それに依つて統計は第一に現實派社會經濟理論の前提たり得る、何とならば統計によりて豫め設けられたる研究基礎は假の粗なる無恰好なる大量に過ぎず、更に一層科學的なる加工過程が施されるものである。

併しかく云へばとて統計的事實調査は「事實」の忠實なる

描寫を與へ得るものと云ふを得ない。我々は早撮寫眞を以てしても活動寫眞を以てしてもそれをなし得ない。かくの如き比較は最近ウォルフが時々特別なる場合に適當なりと主張してゐるが、統計方法の本質を根本的に誤解するものである。總ての科學的考察に於けると同様、統計も亦一方的な視角より經驗的事實を説明する。然らずんば統計が種々の學說に於て蒐集したる資料は秩序なく不明瞭で科學的には利用し得ないものとなるであらう。事實の蒐集が事實の選別と組織的に結び付けられ、更に價值抽出が科學的に重要なもの、みを處置し得しめる事は統計方法の特性である。現象の多様性はその本質の一定方面を考慮する事に依つて、例へば調査單位を特徴付ける調査標識の決定に依つて把握せられ得る。

調査せらるゝ標識が多い程、それ丈調査單位はその個々の特性が完全に表現し得らるゝ事となり、その逆も亦眞である。併し乍ら漏れなき標識調査の如きは云ふべくして行はれなす。

四、社會經濟的經驗目的及認識目的の若干の本質的特性とそれに關聯したる方法論的推論

經濟學に於ては一定の限界内に於ては自然科学的方法を例へば自然科学的方法中文化科學として正しく要求し得るものも等しく利用すべきである。唯問題となり得るは一定の方法の時々の支配であつて獨裁ではない。

社會經濟に於ては特殊の状態の下に經濟現象と社會現象との二つの現象が融合してゐる。此の兩者は共同體となりて結合し常に大量現象とし現はれるのである。而して社會現象に關してはそれがその本質に於て大量的性質を有せねばならぬ事を指摘するだけで充分であらう。個々に考へられる個體は社會的のものでもなければ、社會現象を醸成する方法をも可能ならしめない、個體が他のものと共同し結合して表現せらるゝ時はかくの如きものが先づ概念的に現はれる、茲に於て社會的事實は多様、多數、集積、大量等の概念のストックを前提とする、從て社會事實を取扱ふ科學はそれに關心を有するのみにて、先づ集合して一の社會現象を構成する單一現象に關心を有するものでない。

純粹なる經濟事實例へば貨財の稀少性の克服を目的とするが如きものはそれ自體勿論何等大量的性質を有するを要しない。認識目的の概念決定より出發したる如く社會經濟學者に

科學の獨立性はその認識目的に依り與へられ、その方法の統一性によるものでない、にも不拘、一の科學の内には多くの研究方法が包藏し得られるといふ經驗的に與へられたる前提の下に時々一の方法が特に經驗對象に適し恐らくはそれが優勢なものとして現はれ他の方法が恰もそれを補充する地位に置かれるが如き事あるや否やの疑問が提出せられる。經驗的にはかゝる推定は事實總ての場合に於て認められる。併し乍ら之に對する證據は社會經濟學についてのみ當然齎さるべきであり且つ又可能である。方法が資料の特性に従はねばならぬとする事は恐らく獨乙に於ける歴史學派の代表者就中クニース、ヒルデブランド及リニューメリンに依つて辯護せられてゐる。又新しい論理學がリツケルトに對して樹てられ、マツクス・ウェーバーは新に此の觀點に立つてゐる。結合したる要件として豫め示されたる方向に問題は作用する。而してそれは一定の經驗的事實の上に擴がり、その結果その特殊性は顧慮せらるゝの要がなくなる。經驗目的と認識目的との間に存する密接なる關係に依つて、直ちに、思惟方向のみが一定の方法を決定すべきでない事が明かにせられる。之に對して研究の途を専ら目的によつて定めんとするは偏恣である。社會

とつては唯社會的なるものとの關係に於て、換言すればそれと人的結合に於て現はるゝ社會現象のみが重要である。此の意味に於て價格、勞賃、利子、地代、貨幣、信用等は代表的なる社會經濟的範疇である、即その大量性に於てのみ研究の對象となる經濟的に規定せられたる社會的事實の表現である。

それ故に表現の大量性は社會經濟に於ける社會的及經濟的要素に固有のものであつて、その他のものは可分性を有する資料である。物財界及社會的個體の領域は永久的の鬭争にも不拘、統一を目指し内容的問題のみならず方法的問題をも決定せんとする世界を表現する。唯上述の方面に於ては茲に一層闡明にせねばならない。我々の科學の經濟的要素は、貨財論の中に最も純粹に表現せられてゐるが、それは次の事を規定してゐる、即數量が大なる役割を勤めてゐ、その程度も高くシユンペーターをして理論的國民經濟學をその資料が數學的處理の可能なる貨財數量の學問なりと偏恣的に認めしむる程のものである。我々の社會經濟的經驗目的及認識目的の本質の把握は此の種の單純化を認めない、我々は貨財の移動を

人的活動の表現と見、次にそれを社會的個體の活動と認識する。ゴツトル・オットリリン・フェルドが「社會科學は精神的に克服すべき事實を有し自然科學は資料を有す」と述べてゐるのも此の意味に於ける自然的領域と人的領域との差異を適切に論示したものである。意思の賦與せられ目的を追求する人間は質的及量的に貨財の世界を構成し、それをその需要の尺度としてゐる。社會經濟に於ては總ての原子的のものを摘出してゐる、蓋し社會的個體は生命なき交換の可能なる一の記號でもなければ模範的な生活者及消費者でもない。社會經濟の種類に屬する總ての事件は人的に規定せられてゐる、換言すれば最も多く個別化せられ、その儘自然的事件として考察し得ず從て又科學的に處理し得ない。

此の認識よりして次の如き事を知り得る、社會的事件は人的活動によつて決定せられ、從て資料によらず事實を目的とするならば不斷の變動を克服せねばならない。人的生活に於ては概して事件、思想の流れ、制度及現況が原始的に與へられたる儘のものでなく寧ろ不斷の變化を受けるものであるが社會經濟領域に於ても同様である。

社會經濟現象は不斷の變化の中に流れてゐるし、又假令その活動が明白なるリズム例へば規律性が屢々相當認められても尙依然として時々々の條件に從つて個々の様相を表現する事があるのである。

上述したる社會經濟研究對象の本質的固有性からして、今二、三方法的結果を示すの要がある。大量性が經濟的社會的事實に現はれ正確なる歸納法の利用を妨害する。蓋し個體よりの歸結を他の未だ觀察しない現象にあてはめて有效なる結果に導き得るは現象の基本事相の總ての表現が同種のものである場合に限り、從て之が事實存しない限り歸納による結果はその利用性を減殺せられる。我々は一層個別化せられたる現象を目的としてゐるから此の種の歸屬が認容せられない事は既述したる所である。

慎重に云へば社會經濟に於ける現象を完全なる均等性をもつものと云ひ得ないから少くとも補充的に歸納的個體分析の外に資料の本質に一層よく適合する他種の手段を用ひねばならぬ事が明かとなるのである。

擬統計はその要求に極めて廣く適合する一の方法である、

統計は大量現象を把握するには他に比をみない研究方法である。殆んど總ての定義は此の要素を表現してゐるが統計は大量觀察の最も代表的なる方法と云ひ得る。統計に依つて一の大量の各成分は選ばれたる標識に從つて調査せられ、調査單位の範圍が大となるに従ひ、換言すれば集合體が充分なればそれ文統計はその方法上の理想に一層近づき、反對に觀察事例が少くなるに従ひ理想より隔離し歸納的個別調査の性質に近づく、統計方法はそれが大量の解析を表現する所、大數法則が作用する所換言すればその論理的前提が與へらるゝ所にのみ全く純粹に現はれて来る。

又所謂「假説統計方法」——極めて不幸なる説明であるが——は純粹の統計より單位觀察に至る迄の過程を示すものである。例へば記入はそれが大量記入であり且單に若干の記入に止らざる限り、充分價值ある統計方法である。後の場合に於ては即ち可能なる場合の唯一の部分にして而も代表的のものと思料せらるゝものを記載する代表法に類するのである。併し又、試金研究の變化に於けると同様その統計的特徴が減少しないやうに充分多數の單位に互つて研究せなければなら

ない。所謂代表的單位觀察は屢々假設統計方法として認めらるゝものであるが單位觀察として一の歸納方法であつて最早統計方法でない。それは統計的資料蒐集と結付いて始めて統計方法として價值ある訊問法によつて價值づけられる。此の事實によつて又二つの論理的に異なる研究の途が合目的基礎より結付つて來る、即一は少數の個々の場合を逐一洩さぬ質問と他は補充的統計的大量觀察である。

社會科學には精神的に克服すべき事實があり、自然科學には資料がある。後者は不變なる原子の世界を説明し、前者は影響に意識的であり、形成に新しく即變化多きものの領域を説明する。上述したる如く歸納法の援用に狭い限界が示されるが問題として残る所は統計的大量觀察が如何なる程度に迄社會經濟的事實の個々の特質を觀察し得るかと云ふ事である。

此の問題は次の如き理由に依つて肯定せられる、即統計は直接に經驗論換言すれば一の集合體に合一したる個別現象に基いて構成せられ従て總てのその階級及變化が共に注意せられるのである。統計的結論は假令その正確性が歸納的結論より

り乏しくとも現實に近い。正しく社會經濟大量の個々の、可變の成分を觀察すれば必ず統計研究が一の相對的特徴、即蓋然的性質を帯びてゐる事を知り得るであらう。之についてはリューメリンが既に次の如く強く指摘してゐる、即自然界に於ては確實に認められ正確に觀察せられた事實には歸納的結論を思はせる理由があるから個體は代表的である、然るに人間生活の世界に於ては個體は個々の特徴を帯びてゐるのである。大體に於て我々は自然界及人間界を代表的個體性の世界及個別性のそれとして區別し得るのである」と、而して氏は適切に次の如く高調してゐる、即「方法的數量的大量觀察は僅かに人的現象の關係につき洞察を與へ得るものである。それは一般に茲に問題としてゐる集合體を、群構成を手段としてその成分に分解し無價値な主觀的な一般觀察の不充分より我々を解放し常に個々の觀察に到達し難きもの、不斷に流轉し多樣的な、差異ある個々のものを何れかの點に於て固く把持し、その觀測臺の網の中に引入れんと努める。」

かくの如くにして統計方法は一方に於ては社會經濟現象の可變部分を科學研究の對象に迄高め更にそれ以上に確たる大結合が支配するものである事を明かにし得るのである。(未完)

米の收量と價格との關係

(相關々係に關する一研究)

昭和五年の米作は、既に九月二十日現在に於ける第一回豫想收穫高に於て、六千六百八十六萬余石、續いて十月末日現在に於ける第二回豫想收穫高に於て、六千五百三十萬余石と共に未曾有の大豊作を傳へられて居たが、實收高の發表あるや、實に、六千六百八十八萬余石と云ふ、全く思ひがけない、本邦始めての大増收となつた。然るに此の大豊作は、農民をして鼓腹抃舞せしむるに至らずして、却つて、所謂、豊作

しては、世人は其の原因を専ら最近に於ける米價安に求めて居る様である。宜なる哉、昨年十月以來の米價の大暴落を見ては誰しも其の感を深くせざるを得ないのである。即ち深川正米市場の昨年六月以來の米價を見るに

飢饉なる新熟語をさへ作らしむる結果となり、今や農民も爲政者も相共に、其の前後策に腐心しつゝある有様である。この未曾有の大豊作が斯くも思はざりし結果を招來せる事に關

昭和五年六月	二七・三八
七月	二九・一八
八月	三〇・五三
九月	二八・七〇
十月	一九・一三
十一月	一八・一三

十二月 一八〇四
昭和六年一月 一七・六五
二月 一七・六八

となり、十月以來の大暴落の結果は大正五年當時の米價を再
現せんとするに至つたのである。更に農家の庭先相場に至つ
ては、言語に絶し、米一升が敷島一個の値段にも當らず、貨
幣の極度に缺乏せる農村には、再び物々交換の珍現象をさへ
處々に現出するに至つたとの事である。農民一年辛苦の結果
が、遂に其の肥料代をも償ふに至らないとあつては、農民た
るものは泣くにも泣かれぬであらう。農業恐慌とは、洵に
言ひ得て妙である。

此の秋に當つて、農民は如何に處すべきか。又農政に携は
る者の此の恐慌に對する策如何等は、現下農業問題の主要部
分を占むるものでなければならぬと思ふのであるが、此等
に就ては、既に幾多の議論が闘はされ、又現に闘はされつゝ
あるを以て、今更何をか蛇足を加へんやである。併し乍ら此
種の議論の中にて、筆者の疑問に思ふ點は、最近の米價安

を以て、それが單に豊作に依る米の増收のみに依存するもの
なりとする議論である。昭和五年の米收穫高が六千七百萬石
弱、過去五ヶ年の平均收穫高に比して一割二分五厘もの増收
であつたと云ふ事實が、最近の米價安の唯一の原因であるが
如くに見る説に對して、筆者は必ずしも、承服しないのであ
る。

一體米の價格と收穫高とは如何なる關係に在るものだらう
か。小麦の價格と其の收量とに關して、嘗てキングの英國に
於ける調査研究ありて、其の收量若し平年より減ずる事一割、
二割、三割ならば、その價格の騰貴は、夫々三割、八割、十
六割であると云ふ、所謂キングの法則なるもの、一般に稱へ
られて居るのであるが、これとても英國社會の十七世紀末に
妥當する所謂「個別的法則」たるに過ぎないのであつて、こ
れが其の儘他の社會、時代に適用するものでない事は、認
めねばならない事であり、本邦の米價と其の收量との間に存
する數量的關係に就ては、別に研究さるべき性質のものであ
ると思ふが、不幸にして、未だ之に關して定説あるを聞かぬ
のである。

限界効用價值、需要供給、價格と此等一連の經濟理論を考
へ來るならば、豊作に依つて、米の供給量が増加する事は、
米の價格を下落せしむる事となり、反對に凶作による供給量
の減少は、價格を騰貴せしむる事となると云ふ命題には、そ
れ自身何の矛盾をも含むものではないのである。併し乍ら、

現實の經濟現象は、此の理論通りに進行しないのである。經
濟社會には經濟理論が考へ得る以外の幾多の因子が存して、
相互に作用し、經濟現象をして、其の理論的分析以上に複雑
化せしめて居るのである。米價の變動に就ても、右の事は云
ひ得るのであつて、理論上よりすれば、米の收穫高の増減は
直に米價の變動に反映さるべき筈のものであるけれ共、實際
の米價の動きを見るに、常に必ずしも、其の收穫高の變動を
反映して居らないのである。

收穫高と價格に就て經濟理論を云々する場合は、他の事情
にして不變なりとすれば、(other conditions being equal)
と云ふ假定の許に於ての事であるから、是が直に現實の經濟
社會に其の儘、現れると考へるのは、理論と云ふものゝ性質
を知らざる者であつて、假令、理論通りに經濟現象が起らな

いからと云ふて、理論その物は、豪も、それ丈の理由から
非難するものでない事は當然の事であるが、世の中には、
理論の中に前提せられて居る假定を忘れて、其の儘理論を實
際社會に適用せんとする者が往々にして存するのである。

經濟法則としての供給と價格との關係を其の儘、米價に當
欲めた議論が即ち、最近の米價安の原因は、昭和五年の大豊
作に在りとする説である。成程、昭和五年九月迄は二十七、
八円を呼んで居た米價が十月に入つて、東北地方の新米の出
廻る時分から遽に十八、九円に下落し、それ以來多少の騰落
はあるにしろ、兎に角、十円臺と云ふ十數年來の安値を呼ん
で居る現状から推して、如何にも、昭和五年の豊作が此米價
下落の原因であるが如くに、一應は考へられるのである。併
し乍ら豊作が此の米價安の原因であるとする根據は、果して
確實なものであらうか。經濟理論は供給の増加を以て價格下
落の原因たり得る事を教ゆる。而して米價は收穫時期を境と
して下落した。是丈の事から、米價の下落原因は豊作に在
りとするは餘りにも粗雑な觀察と云はねばならぬ。何となれ
ば、過去の經驗に徴して豊作は必ずしも米價の下落を伴ふて

居らないが故に、豊作は米價安の原因なりと断定する充分の根據とはなり得ないからである。

抑、甲現象が乙現象の原因なりと判断し得る爲に必要にして充分なる條件は、甲現象の生起は常に必ず乙現象の繼起を伴ふと云ふ事である。甲現象が生起すれば、之に繼いで必ず乙現象が起り、逆に乙現象の生起には必ず甲現象の先起を要すると云ふ様な場合に、我々は甲現象を以て、乙現象の原因なりとする事が許されるのである。此の筆法を以てすれば、過去の經驗に於て、豊作が必ず米價の下落を伴ふて居り、又米價の下落せる年は必ず、その前年の收量が多かつたと云ふ場合に始めて、今回の豊作が最近の米價安の原因なりと断定し得る事となる譯であるから、是には一應、過去の米價と收量との關係を調べて見る必要があるのである。

二

米價と收量との關係に就ては、既に古くから色々の研究がなされて居る。岩井屋算盤なども其の一例であり、降つては稻垣乙丙博士の高田保馬博士の猪間驥一氏の勝賀潮質氏等の詳細なる統計的研究がなされて居るのである。而して此

等の研究の結果は、何れも收穫高は米價の變動因子として相當重要な地位に在るも、決定的なる唯一の因子に非らざることである。

- (1) 稻垣乙丙「最小律の展開漸減則の充實」P. P. 154-168
- (2) 高田保馬「經濟學研究」P. P. 616-648
- (3) 猪間驥一「米の收穫高と價格との關係」經濟學論集第三卷第二號
- (4) 勝賀潮質「米價の變動と其の影響」農業經濟研究第三卷第二號

高田博士は極秘傳に修正を施して

$$y = \frac{1}{x} + \frac{1-x}{x}$$

(但しyは米價の騰落、xは收量の多寡)なる方程式を以て良く米價と收量との關係を表示するものとせられ、回歸方程式としては

$$y = -1.21680x + 0.01530x^2 - 0.00015x^3$$

を算出されて居るが、右は要するに收量xが與へられるればyが唯一つ丈け定まると云ふ所謂函数的關係(Funktioneller Zusammenhang)に在ることを云ふものではなくて、xが定まれば、yは一定の確率の許に數種の値を採り得ると云ふ

所謂蓋然的關係(Stochastische Verbundenheit)を述べた

のに過ぎない。亦稻垣博士其の他の諸氏の研究も皆同様であつて米收量と價格とは密接なる關係は認むるも、完全なる因果關係は認められないと云ふ結論に達する。

以上の諸點を考慮し、更に自身の立場と方法とに依つて更に實證的立場より今回の米價安の原因がその豊作のみに在らざるを述べて見る。

米收量と米價との關係を見る爲に、屢々用ひらるるは、兩系列の關係を直線的關係(Linear relationship)と見做し其の相關係數(coefficient of correlation)を算出する事であるが、此の場合に、兩系列の如何なる數値を比較するかに依つて、其の經濟的意味も其の係數の値も多少異つて來るのである。

即其の方法としては

一、兩系列の長期的傾向からの偏差の相關關係を求むる方法
此の場合長期的傾向として最小自乗法に依れる回歸方程式を取るか、移動平均を採るかに依つて、一、は更に二つの方法に分けられ、其の各は更に

- (イ) 偏差の絶對値に依る方法
- (ロ) 偏差の傾向値に對する比による方法に分けられる。

二、年から年への増減量の相關々係を求むる方法

二は更に次の二つに分けられる。

- (イ) 年々の増減の絶對量に依る方法
- (ロ) 年々の増減量の割合に依る方法(連鎖指數に依る)

右の各方法には夫々特長と欠點とを有し、何れが優れりと一概に決定する事は出來ないが、私が茲に用ひんとするのは、此の最後の連鎖指數に依る方法である。

三

米收量及年平均價格(但し茲に年と云ふは前年十一月に始まり其の年十月に終る米穀年度の事であつて、以下いよいよ斷らざるも米價に關しては總て米穀年度を用ふ)に就て、夫々其の前年の値を以て除したる連鎖指數を作成する。

(第一表参照)

第一表 米收穫高と米價

年 度	米 穀 實收 單位1,000石	前年を100とせる指數	米 價 (深川正米市場)	
			實 數	前年米價を100とせる指數
明治三十四年	四一、四六六	一一三・一	二二・二五	一一〇・〇
三十五年	四六、九二四	一一三・一	二二・二五	一一〇・〇
三十六年	三六、九三三	七八・七	二四・七〇	一一〇・〇
三十七年	四六、四七三	一一〇・七	二二・六八	一一〇・〇
三十八年	五二、四三〇	一一〇・七	二二・六八	一一〇・〇
三十九年	三八、一七三	七四・二	二四・四六	一一〇・〇
四〇年	四六、三〇三	一一〇・三	二六・二七	一一〇・〇
四一年	四九、〇五二	一一〇・九	二六・二四	一一〇・〇
四二年	五二、九三三	一一〇・〇	二六・三九	一一〇・〇
四三年	五二、四三八	一一〇・〇	二六・三三	一一〇・〇
四四年	四六、六三三	八八・九	二七・〇七	一一〇・〇
四五年	五二、七二二	一一〇・九	二〇・二五	一一〇・〇
四六年	五〇、二五三	九七・一	二二・七八	一一〇・〇
四七年	五〇、二五三	一一〇・一	二二・五八	一一〇・〇
四八年	五〇、〇七	一一〇・一	二二・五八	一一〇・〇
四九年	五五、九三三	九八・一	二二・二二	一一〇・〇
五〇年	五八、四四二	一〇四・五	二一・八七	一一〇・〇
五一年	五八、四四二	九三・四	二〇・〇一	一一〇・〇
五二年	五四、五六八	一一〇・二	二〇・〇一	一一〇・〇
五三年	五四、六九九	一一〇・二	二〇・〇一	一一〇・〇
五四年	六〇、八一九	一一〇・二	二〇・〇一	一一〇・〇
五五年	六三、二〇九	一一〇・三	二〇・二〇	一一〇・〇
五六年	五五、一八〇	八七・三	二六・八五	一一〇・〇
五七年	六〇、六九四	一一〇・三	二六・八五	一一〇・〇
五八年	五五、四四四	九〇・四	二七・七四	一一〇・〇
五九年	五〇、四四四	一一〇・一	二七・七四	一一〇・〇
六〇年	五〇、四四四	一一〇・一	二七・七四	一一〇・〇
大正四四年	四六、六三三	八八・九	二七・〇七	一一〇・〇
四五年	五二、七二二	一一〇・九	二〇・二五	一一〇・〇
四六年	五〇、二五三	九七・一	二二・七八	一一〇・〇
四七年	五〇、二五三	一一〇・一	二二・五八	一一〇・〇
四八年	五〇、〇七	一一〇・一	二二・五八	一一〇・〇
四九年	五五、九三三	九八・一	二二・二二	一一〇・〇
五〇年	五八、四四二	一〇四・五	二一・八七	一一〇・〇
五一年	五八、四四二	九三・四	二〇・〇一	一一〇・〇
五二年	五四、五六八	一一〇・二	二〇・〇一	一一〇・〇
五三年	五四、六九九	一一〇・二	二〇・〇一	一一〇・〇
五四年	六〇、八一九	一一〇・二	二〇・〇一	一一〇・〇
五五年	六三、二〇九	一一〇・三	二〇・二〇	一一〇・〇
五六年	五五、一八〇	八七・三	二六・八五	一一〇・〇
五七年	六〇、六九四	一一〇・三	二六・八五	一一〇・〇
五八年	五五、四四四	九〇・四	二七・七四	一一〇・〇
五九年	五〇、四四四	一一〇・一	二七・七四	一一〇・〇
六〇年	五〇、四四四	一一〇・一	二七・七四	一一〇・〇

昭和	大正
五年	二一年
四年	二〇年
三年	一九年
二年	一八年
一年	一七年

(備考) 米收穫高は三三年の收穫を三四年度の行に、三四年の收穫を三五年度の行に以下同様記入す

第一表第三欄と第五欄の兩指數を比較して見るに、大體米收量の多寡と米價の高低とが逆の關係に近い事の想像は付く。併し收穫高が前年に比して、一割以上も増加せるに米價の下落せざりし年が明治三十五年、全四十年、大正元年、大正九年と數年存し、又昭和二年、全四年は收量減じたるに、米價は上昇せずして、下落して居る様な状態が必ずしも、一概には論ぜられない。尤も右は現實の米價に就てであつて、右の米價の變動の中には、一般物價平準の變化も含まれて居る譯であるから、之を考に入れねばならぬ。而して明治三十三年以來、一般物價平準には、かなり著しい變化が起つて居るのであるから、此の一般物價平準側の變動、換言すれば貨幣價値の側に於ける變動を除去するならば、一層米價と收量

との關係を理論的に密接ならしむる理であるから、右の米價指數を更に物價連鎖指數を以て除して第二表を得る。

第二表 物價平準の變動を除去せる米價連鎖指數

年 度	米 穀 前年を100とせる日銀物價指數 P	米 價 前年を100とせる米價指數 R	實價米價連鎖指數 R ÷ P × 100
明治三十五年	九九・四	一一〇・〇	一一〇・六
三十六年	一〇四・三	一一八・六	一一三・四
三十七年	一〇三・八	九六・五	九二・七
三十八年	一〇三・三	一一五・〇	一一〇・四
三十九年	一〇七・五	一一三・二	一〇五・三
四〇年	九九・〇	九七・三	九八・五
四一年	一〇四・二	一〇四・三	一〇〇・二
四二年	一〇〇・三	一〇四・三	一〇四・三
四三年	一〇〇・二	一〇三・二	一〇三・二
四四年	一〇〇・八	一一一・〇	一一〇・六
四五年	一〇一・六	一〇七・一	一〇五・三
四六年	九七・六	八〇・六	八二・四
四七年	九七・五	七四・九	七六・八
四八年	一一〇・三	一〇一・五	九二・一
四九年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五〇年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五一年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五二年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五三年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五四年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五五年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五六年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五七年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五八年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五九年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
六〇年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
大正四四年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
四五年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
四六年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
四七年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
四八年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
四九年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五〇年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五一年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五二年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五三年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五四年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五五年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五六年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五七年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五八年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
五九年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇
六〇年	一一〇・六	一一〇・六	一〇〇・〇

之を假りに實價米價連鎖指數とし、是と第一表に示せる收穫高の連鎖指數との相關係數を測定する。

- 收量指數を R
 - 收量指數の算術平均値よりの偏差を σ_R
 - 米價指數を Y
 - 米價指數の算術平均値よりの偏差を σ_Y
 - 收量指數の標準偏差を σ_{Ry}
 - 米價指數の標準偏差を σ_y
- とすれば收量指數と米價指數との相關係數 r は次式で與へらる。

$$r = \frac{\sum Rdy}{N\sigma_y \sigma_R} \pm P. E.$$

但しNは調査年數 P. E. は蓋然誤差 (Probable error)
 右に第一表、第二表の數字を當接めて計算すれば

$$r = -0.5462 \pm 0.0832$$

を得る。此の結果は、米收量と米價との間には、逆相関の存する事を語るものであるけれど、其の相関係数はあまり大なりと云ふ事は出来ぬ。

而して更に實質米價連鎖指數と、米收穫高連鎖指數との關係を $y = a + bx$ なる直線的關係と假定して回歸方程式 (Equation of regression) を算出するならば

$$y = 3.043 - 0.761x \dots\dots\dots (1)$$

但し $x = 100$ $y = 100$ を原點とする

右の回歸方程式に x を與へて計算したる y の値と實際の實質米價連鎖指數との差の平方の總和を二十八にて除したるものの平方根、所謂標準誤差 (Standard error) を求むれば

$$S_y = 11.63$$

となるから、結局右の式にて計算せる y の $y \pm 11.63$ の間に全系列の 68% が込入り $y \pm 23.26$ の間に 95% が込入り、更に $y \pm 34.89$ の中には全系列の 99.7% が入り來ることゝ

なるのであるから、右の回歸方程式に依る計算の結果には、相當大きな幅を見積らなければ、 x と y との關係が表現され得ないこととなる。
 右は年平均米價に就ての觀察であるが、或る年の收量が米價に作用する程度は、一年を通じて同一なりとは考へられぬ。新穀が市場へ出廻る數量は月により異なるのであつて、先づ十月頃より東北地方の米が出廻り始め、十一月十二月と次第に數量を増し、一月よりは再び次第に減少して行くのである。之を實證する數字としては、道府縣産米の月別管外移出額を擧げる事が出来る。

第三表 道府縣産米の月別管外移出額(全國平均)

月次	實數	全移出高を100とせる割合
四月	大正一五、昭和二、三、四、五、五ヶ年平均	100
五月	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	九・六 一一・五 一三・〇 一四・六 一六・二 一七・八 一九・四 二一・〇 二二・六 二四・二 二五・八 二七・四 二九・〇 三〇・六 三二・二 三三・八 三五・四 三七・〇 三八・六 四〇・二 四一・八 四三・四 四五・〇 四六・六 四八・二 四九・八 五一・四 五三・〇 五四・六 五六・二 五七・八 五九・四 六一・〇 六二・六 六四・二 六五・八 六七・四 六九・〇 七〇・六 七二・二 七三・八 七五・四 七七・〇 七八・六 八〇・二 八一・八 八三・四 八五・〇 八六・六 八八・二 八九・八 九一・四 九三・〇 九四・六 九六・二 九七・八 九九・四 一〇〇

總數	九	八	七	六	五
九	八	七	六	五	四
八	七	六	五	四	三
七	六	五	四	三	二
六	五	四	三	二	一
五	四	三	二	一	〇
四	三	二	一	〇	-1
三	二	一	〇	-1	-2
二	一	〇	-1	-2	-3
一	〇	-1	-2	-3	-4
〇	-1	-2	-3	-4	-5
-1	-2	-3	-4	-5	-6
-2	-3	-4	-5	-6	-7
-3	-4	-5	-6	-7	-8
-4	-5	-6	-7	-8	-9
-5	-6	-7	-8	-9	-10
-6	-7	-8	-9	-10	-11
-7	-8	-9	-10	-11	-12
-8	-9	-10	-11	-12	-13
-9	-10	-11	-12	-13	-14
-10	-11	-12	-13	-14	-15
-11	-12	-13	-14	-15	-16
-12	-13	-14	-15	-16	-17
-13	-14	-15	-16	-17	-18
-14	-15	-16	-17	-18	-19
-15	-16	-17	-18	-19	-20
-16	-17	-18	-19	-20	-21
-17	-18	-19	-20	-21	-22
-18	-19	-20	-21	-22	-23
-19	-20	-21	-22	-23	-24
-20	-21	-22	-23	-24	-25
-21	-22	-23	-24	-25	-26
-22	-23	-24	-25	-26	-27
-23	-24	-25	-26	-27	-28
-24	-25	-26	-27	-28	-29
-25	-26	-27	-28	-29	-30
-26	-27	-28	-29	-30	-31
-27	-28	-29	-30	-31	-32
-28	-29	-30	-31	-32	-33
-29	-30	-31	-32	-33	-34
-30	-31	-32	-33	-34	-35
-31	-32	-33	-34	-35	-36
-32	-33	-34	-35	-36	-37
-33	-34	-35	-36	-37	-38
-34	-35	-36	-37	-38	-39
-35	-36	-37	-38	-39	-40
-36	-37	-38	-39	-40	-41
-37	-38	-39	-40	-41	-42
-38	-39	-40	-41	-42	-43
-39	-40	-41	-42	-43	-44
-40	-41	-42	-43	-44	-45
-41	-42	-43	-44	-45	-46
-42	-43	-44	-45	-46	-47
-43	-44	-45	-46	-47	-48
-44	-45	-46	-47	-48	-49
-45	-46	-47	-48	-49	-50
-46	-47	-48	-49	-50	-51
-47	-48	-49	-50	-51	-52
-48	-49	-50	-51	-52	-53
-49	-50	-51	-52	-53	-54
-50	-51	-52	-53	-54	-55
-51	-52	-53	-54	-55	-56
-52	-53	-54	-55	-56	-57
-53	-54	-55	-56	-57	-58
-54	-55	-56	-57	-58	-59
-55	-56	-57	-58	-59	-60
-56	-57	-58	-59	-60	-61
-57	-58	-59	-60	-61	-62
-58	-59	-60	-61	-62	-63
-59	-60	-61	-62	-63	-64
-60	-61	-62	-63	-64	-65
-61	-62	-63	-64	-65	-66
-62	-63	-64	-65	-66	-67
-63	-64	-65	-66	-67	-68
-64	-65	-66	-67	-68	-69
-65	-66	-67	-68	-69	-70
-66	-67	-68	-69	-70	-71
-67	-68	-69	-70	-71	-72
-68	-69	-70	-71	-72	-73
-69	-70	-71	-72	-73	-74
-70	-71	-72	-73	-74	-75
-71	-72	-73	-74	-75	-76
-72	-73	-74	-75	-76	-77
-73	-74	-75	-76	-77	-78
-74	-75	-76	-77	-78	-79
-75	-76	-77	-78	-79	-80
-76	-77	-78	-79	-80	-81
-77	-78	-79	-80	-81	-82
-78	-79	-80	-81	-82	-83
-79	-80	-81	-82	-83	-84
-80	-81	-82	-83	-84	-85
-81	-82	-83	-84	-85	-86
-82	-83	-84	-85	-86	-87
-83	-84	-85	-86	-87	-88
-84	-85	-86	-87	-88	-89
-85	-86	-87	-88	-89	-90
-86	-87	-88	-89	-90	-91
-87	-88	-89	-90	-91	-92
-88	-89	-90	-91	-92	-93
-89	-90	-91	-92	-93	-94
-90	-91	-92	-93	-94	-95
-91	-92	-93	-94	-95	-96
-92	-93	-94	-95	-96	-97
-93	-94	-95	-96	-97	-98
-94	-95	-96	-97	-98	-99
-95	-96	-97	-98	-99	-100

(備考) 六年一月米穀要覽による
 従つて米價の季節的變動を見るも

第四表 實質米價の季節的變動指數

月次	季節的變動指數
十一月	99.5
十二月	97.1
一月	96.2
二月	97.3
三月	97.8
四月	98.1
五月	99.5
六月	101.2
七月	103.3
八月	105.0
九月	103.7
十月	101.3

(備考) 本指數はパースンズ教授の連鎖指數法に據り算出す

第四表の示す如く、米價は新穀の出廻りと共に下落し、十一月、一月、二月頃の出盛期に最低値を現す事となるのであ

る。斯く新穀の出廻りによつて、米價に季節的變動がある位であるから、各年の新穀の量の多寡が、米價に影響する程度は月に依り異なるであらう事は推察するに難くない。尤も五、六月以後の米價は、兎もすれば、次の收穫の豊凶を豫想して其の月々の天候などによつて一上一下する傾向を有し、前年の收穫高の影響は次第に薄らぐ傾向が存する様である。此の推論を確むる一法として、一年(米穀年度)を四期に分ち、即十一月より一月に至る新穀の出廻りに依つて、米價が下落の傾向を辿る時期を第一期、二月から四月に至る米價の底入れ時期を第二期、五、六、七月の米價上昇期を第三期、八月、九月、十月を第四期とし、各年の各期の平均米價を求め、各期毎に前年同期の平均米價を以て除したる一種の連鎖指數を作り、更に之より一般物價平準の變動を除去する爲に、一般物價指數に就ても同様のものを作成して、之を以て曩の米價指數を除し、之を各期の實質米價連鎖指數としたのである。

第五表 各年各期實價米價連鎖指數

年 度	第一期 (前年十一月より當年一月迄)				第二期 (二月より四月迄)	第三期 (五月より七月迄)	第四期 (八月より十月迄)
	前年第一期を百とせる當年第一期米價指數 A	同日銀物價指數 B	第一期實價米價連鎖指數 A÷B×100	第一期と同様の方法に依りて算出せる第二期實價米價連鎖指數	第一期と同様の方法に依りて算出せる第三期實價米價連鎖指數	第一期と同様の方法に依りて算出せる第四期實價米價連鎖指數	
明治三三年	101.3	99.9	101.4	99.1	104.3	99.9	
明治三四年	119.3	105.2	113.4	112.0	115.6	93.5	
明治三五年	87.9	104.4	84.2	81.1	84.4	92.5	
明治三六年	103.3	107.4	95.2	88.1	85.1	102.6	
明治三七年	109.3	106.6	102.5	104.2	100.0	109.6	
明治三八年	110.7	105.3	104.1	104.2	104.7	106.0	
明治三九年	101.5	104.6	97.1	100.2	103.9	101.0	
明治四〇年	78.3	104.6	74.9	79.6	87.2	90.7	
明治四一年	89.3	99.7	89.5	90.6	91.3	90.7	
明治四二年	76.6	104.5	76.3	72.5	75.5	96.6	
明治四三年	134.4	104.5	128.6	126.2	137.5	127.6	
明治四四年	114.2	104.0	109.8	106.6	114.3	106.9	
明治四五年	117.3	105.2	111.0	108.1	115.5	107.2	
明治四六年	101.9	99.9	101.0	101.6	101.1	103.8	
明治四七年	104.0	104.0	100.0	95.4	99.5	97.6	
明治四八年	106.0	107.9	98.2	95.6	97.1	93.8	
明治四九年	104.0	108.0	96.3	92.7	95.2	95.8	
明治五〇年	106.0	107.4	98.7	96.7	99.0	95.5	
明治五一年	101.9	101.1	101.3	103.0	106.1	104.8	
明治五二年	104.0	111.2	93.5	90.7	95.8	93.8	
明治五三年	106.0	108.0	98.1	95.4	97.1	95.5	
明治五四年	101.9	107.4	94.9	92.7	95.2	93.8	
明治五五年	104.0	107.4	96.8	94.7	97.1	95.5	
明治五六年	106.0	108.0	98.1	95.4	97.1	95.5	
明治五七年	104.0	107.4	96.8	94.7	97.1	95.5	
明治五八年	106.0	108.0	98.1	95.4	97.1	95.5	
明治五九年	104.0	107.4	96.8	94.7	97.1	95.5	
明治六〇年	106.0	108.0	98.1	95.4	97.1	95.5	
昭和元年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和二年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和三年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和四年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和五年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和六年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和七年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和八年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和九年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	
昭和一〇年	99.8	100.0	99.8	100.0	100.0	100.0	

而して、この各期の米價と前年の米收量との相關係數を求めらば、

- 第一期 $r = -0.443 \pm 0.0936$
- 第二期 $r = -0.543 \pm 0.0815$
- 第三期 $r = -0.532 \pm 0.0835$
- 第四期 $r = -0.335 \pm 0.1033$

となり、第二期が最高の相關係數を示し、第三期之に比して稍低く、第一期は更に低く〇・四四三となり、第四期に至つては僅に〇・三三五の低値を示し、兩者の關係は極く微弱である。而して第四期に於ける相關係數の小なる事は、第四期の米價が前年の收量に支配さるゝ事の動きを示すものである。

更に收量と各期の米價連鎖指數との關係を回歸方程式として求むれば、

- 第一期 $y = 2.82 - 0.693x \dots (2) \quad S_y = 13.86$
- 第二期 $y = 2.86 - 0.769x \dots (2) \quad S_y = 13.45$
- 第三期 $y = 3.55 - 0.892x \dots (4) \quad S_y = 18.10$
- 第四期 $y = 1.97 - 0.411x \dots (5) \quad S_y = 13.20$

となる。而して回歸方程式に於けるxの係數に依りて見れば米收量前年に比して10%の増加は、第一期米價指數に於て前年同期に比して、4.11%の下落を生ずる傾向を有し、第二期に於ては4.83%第三期に於ては4.73%、第四期に於ては2.14%の下落を生ずる事となる。收量の増減が第四期米價を左右する力が比較的尠いと云ふ事は、前にも一言した様に、此の時期になると、次の收穫豫想の影響が多分に入り來り、夫れ丈け、前年の收穫の影響が減ぜらるゝと共に、次期收穫の豫想は、要するに豫想であつて、適確なものでないので、人々各々其の觀察を異にし、又天候等の氣紛れも多分に入來ることゝなつて、此の時期の米價變動に、不規則的變動が多分に入込み來る事を暗示するものである。然らば、次期收穫の豫想が何の程度に、この第四期の米價を左右するものなりやを見る事も徒事ではない。又此の當時の天候狀態との關係も研究上興味ある事であるが、爰には單に、第一回豫想と第二回豫想收穫高との平均(之は八、九月頃の米作に對する氣候狀況を代表するものと見てもよい)を採り、之が前年實收高に對する百分率を求め(第六表参照)

明治	大正	昭和
四〇年	二一年	一一年
四一年	二二年	二二年
四二年	三二年	三二年
四三年	四二年	四二年
四四年	五二年	五二年
四五年	六二年	六二年
四六年	七二年	七二年
四七年	八二年	八二年
四八年	九二年	九二年
四九年	〇二年	〇二年
五〇年	一二年	一二年
五一年	二二年	二二年
五二年	三二年	三二年
五三年	四二年	四二年
五四年	五二年	五二年
五五年	六二年	六二年
五六年	七二年	七二年
五七年	八二年	八二年
五八年	九二年	九二年
五九年	〇二年	〇二年
六〇年	一二年	一二年
六一年	二二年	二二年
六二年	三二年	三二年
六三年	四二年	四二年
六四年	五二年	五二年
六五年	六二年	六二年
六六年	七二年	七二年
六七年	八二年	八二年
六八年	九二年	九二年
六九年	〇二年	〇二年
七〇年	一二年	一二年
七一年	二二年	二二年
七二年	三二年	三二年
七三年	四二年	四二年
七四年	五二年	五二年
七五年	六二年	六二年
七六年	七二年	七二年
七七年	八二年	八二年
七八年	九二年	九二年
七九年	〇二年	〇二年
八〇年	一二年	一二年
八一年	二二年	二二年
八二年	三二年	三二年
八三年	四二年	四二年
八四年	五二年	五二年
八五年	六二年	六二年
八六年	七二年	七二年
八七年	八二年	八二年
八八年	九二年	九二年
八九年	〇二年	〇二年
九〇年	一二年	一二年
九一年	二二年	二二年
九二年	三二年	三二年
九三年	四二年	四二年
九四年	五二年	五二年
九五年	六二年	六二年
九六年	七二年	七二年
九七年	八二年	八二年
九八年	九二年	九二年
九九年	〇二年	〇二年
一〇〇年	一二年	一二年

之と米収量との相関係数を求むれば

$$r = 0.520 + 0.085$$

を得。更に回歸方程式を求むれば

$$y = 1.24 - 0.326x \dots (6)$$

$$S_y = 5.50$$

(但し $x = 100$, $y = 100$ を原點とする)

となり、収量一〇パーセントの増加は、第一期米價をして第四期に比して7.5%下落せしめる事となる。

四

以上を以て、米價と収量との關係を統計的に分析して兩者の間に存する統計的傾向を算出する事を終つたのであるが、右の諸分析の結果を昭和五年の米収量と昭和五年十一月以降の米價に當該めて、今回の米價下落が如何なる性質のものなりやを一應研究する事とする。

昭和五年の米實收高は前年昭和四年の實收高に對する百分比にて示せば、一一・三となり、一一・三%の増收である。

依つて茲に算出せる年平均米價連鎖指數と収量連鎖指數との回歸方程式 (1)式

$$y = 3.043 - 0.761x$$

に代入すれば

$$y = 3.043 - 0.761 \times 12.3 = -6.317$$

即前年(昭和五年度)に比して六・三二七パーセントの低値となる可き筈である(前年を一〇〇とすれば九三・六八三となる)而して昭和五年度の平均米價は二七・三四円、物價指數は一八八・七三なるを以て、昭和六年度の米價は

$$27.34 \times \frac{P}{188.73} \times (100 - 6.317)$$

(但し P は昭和六年度の平均物價指數)

になるのが収量の關係から見てもあり得べき (the most probable) ものだと云ふ事になり、これに近い値を探りし場合は、其の價格は大體収量の影響を正常に反映せるものだと云ふ事になる。

更に、既に米價の判明して居る昭和六年第一期米價に就て考へて見るに、この平均米價は一七・九四円となり、前年第一期米價は二八・〇一円、物價指數は前年第一期は二〇五・八二、本年第一期は一六〇・五〇であるから (2)式

$$y = 2.82 - 0.693x$$

に依つて計算すれば、本年第一期の最も有り得べき實質米價連鎖指數は、

$$y = 2.82 - 0.693 \times 12.3 = -5.70$$

の下落となつて $100 - 5.70 = 94.30$ となる。之に更に物價一般の變動を含ましむれば、

$$28.01 \times \frac{160.50}{205.82} \times \frac{94.3}{100} = 20.60$$

となり、又之を第四期より第一期への變動率より計算するとすれば(6)式

$$y = -4.24 - 0.326x$$

に代入し

$$y = -4.24 - 4.01 = -8.25$$

を得るから、本年第一期實質米價は第四期に比して八・二五パーセントの下落をすることを、之に物價の變動を加除すれば結局、昭和六年第一期の最もあり得べき米價として

$$26.12 \times \frac{160.50}{170.53} \times \frac{(100 - 8.25)}{100} = 22.56$$

を得る。

前の結果は二〇・六〇円、後の結果は二二・五六円となつたのであるが、之に對し現實の昭和六年度第一期米價は一七・九四円であるから何れと比較するも、現實米價の方が低すぎるのである。若し昭和五年の米作が昭和四年の米作と同様であつたと假定するならば、本年第一期米價は(2)式のxを〇として $y = 2.82$ となるから、之に物價指數の變動を乗除して

$$28.01 \times \frac{160.50}{205.82} \times \frac{120.82}{100} = 22.50$$

である。其の他利用せる統計材料にも不備の點あるべきを以て、右の結論がどの程度迄妥當性を有するやは、尙考察の餘地があると思ふが、右の研究の結果、並從來行はれた其の他の研究の結果等より推しても、今回の米價大暴落の全原因を昨年の大豊作のみに歸するは粗雑なる議論たるを免れない。

率 勢 米 價 の 話

は し が き

人口食糧の問題就中米穀の問題は我が國特別の事情よりして全く厄介至極の問題である。今回米穀法を改正する事になつたが其の中心は米價に基準を置かうといふ率勢米價の點である。率勢米價を中心として、その上下二割の範圍内に米價を落付かせやうと云ふ事は過去の統計的經驗から最も近き將來の米價を豫斷せんとするものである。換言すれば經驗に基く米價の學理的豫想である。

過去に於ては米價は一般物價に對して如何なる位置を占め

を得ることとなるから、昭和五年の米收量の増加に依つては結局 $22.50 - 20.60 = 1.90$ となり、前年第一期に比して大約二円内外の米價下落は免れ得ないものと考ふべきであつて、此の程度の下落は、收量の増加に原因して居ると云ひ得る根據はあるけれ共、現實米價に於ける如き $22.50 - 17.94 = 4.56$ 即五円近い下落は到底此全部を昭和五年の米作の豊作なりに歸せしむ可き根據は存しないのである。

又前年第四期より本年第一期に至る下落率を假に收量に變化なきものとして、物價指數の變動を考慮して前の如く計算すれば二三・五〇円位になるのであつて $23.50 - 22.56 = 0.94$ の價格の下落は當然豫想さるべきも $23.50 - 17.94 = 5.56$ の下落は之を收量の増加のみに歸すべく余りに大きすぎるのである。

右の結論は眞に算出せる回歸方程式に基礎を置いての事であるけれ共、根本的には、第一、前記の回歸方程式の算出がそれを直線的なりと假定して居る點に疑問なきを得ない譯であるし、又前記方程式に於ける標準誤差の大なる點より判斷して、あの式の正確度はあまり大きいものとは云ひ得ない譯

豊作は確かに、一つの相當大きな因子ではあるけれ共、其の他に尙幾多の因子の存在する事を認めねばならぬ。又理論的に現下の農業事情、經濟事情を分析するならば原因は更に他の點にも根ざして居る事と信ぜられる。

てゐたか、換言すれば米價の一般物價に對する比率(米價率)が如何なる永年の傾向を示してゐたかと云ふ統計的事實が數學的に具體化され且此の傾向が最も近き將來へ波及するものと假定すれば——此の假定は容認されてゐる——統計的技術に依つて近き將來に於ける米價の一般物價に對する位置を決定する事が出来る。率勢米價算出の基礎は「米價の一般物價に對する位置」の近き將來に於ける豫想に在るのである。而して斯かる豫想の位置が「米價率の趨勢値」と呼ばれてゐる。

約言すれば率勢米價は統計的産物である。而して近き將來に於ける統計的豫想米價であると云ひ得るであらう。率勢米價に關しては昭和六年一月「率勢米價の説明」として農林省農務局より公表したのもあり其の他新聞雜誌にも數多いが此處には主として統計關係者の立場より解説する。

一、率勢米價の算出方法

率勢米價といふのは米價率の趨勢に直線を當て嵌めやうといふのであつて日本銀行調査に係る指數(米價指數及一般物價指數)を使つて次の式で算出するものである。

次に其の式と其計算例とを掲げる。

式

$$\text{率勢米價} = 11.81 \times \text{米價率の趨勢値} \times \text{一般物價指數}$$

式中

11.81……明治三十三年十月の東京深川標準中米の一石建價格(單位円)之は日銀の米價指數の基礎價格となつてゐる

米價率の趨勢値……

$$\text{米價率} = \frac{\text{米價指數}}{\text{一般物價指數}} \quad \text{米價率の過去の趨勢から割$$

出され米價が一般物價よりどれだけ高いか又は低いかの度を示す數字 最小自乗法に依つて算出する 一般物價指數……日本銀行の調査に係り明治三十三年十月を基準とする物價指數

計算例

$$(1) \quad 11.81 \times 1.182 \times \frac{211.09}{100} = 29.467 \dots \text{昭和}^* \text{五年度の率勢米價}$$

(註) * (四年十一月初めから五年十月末日迄)

1.182……昭和5年度の米價率趨勢値

211.09……昭和4年11月の一般物價指數

$$(2) \quad 11.81 \times 1.193 \times \frac{162.20}{100} = 22.853 \dots \text{昭和六年度の率勢米價}$$

(註)

1.193……昭和6年度の米價率趨勢値

162.20……昭和5年11月の一般物價指數

二、解 剖

前掲の如く率勢米價は三個の數字を掛け合はせて算出するもので此の計算に當つて一般物價指數は日本銀行の發表を待

てば分明するが故に其の時々で分らないのは米價率の趨勢値だけである。之の出し方は趨勢の話に譲つてこゝでは三個の數字を掛け合はす意義に付て吟味して見る。

米價率は米價指數を一般物價指數で割つたものであるから

$$\text{米價率} \times \text{一般物價指數} = \frac{\text{米價指數}}{\text{一般物價指數}} \times \text{一般物價指數}$$

$$\text{價指數} = \text{米價指數}$$

$$\text{米價指數} = \frac{\text{米價}}{\text{基準米價}} \quad \text{であるから}$$

$$\text{基準米價} \times \text{米價率} \times \text{一般物價指數} = \text{米價}$$

となる次第である。

次に、

$$\text{米價率の趨勢値} \times \text{一般物價指數}$$

は何になるかと云ふに、米價率の趨勢値は數學的に算出される一種の米價率であるから、前と同様に

$$\text{米價率の趨勢値} \times \text{一般物價指數} = \text{趨勢的米價指數}$$

となるので従つて

$$\text{基準米價} \times \text{米價率の趨勢値} \times \text{一般物價指數} = \text{趨勢的米價}$$

となる。此の趨勢的米價が所謂率勢米價と呼ばれるのである。こゝで明治三十三年十月を基準とした指數を使ふ事にすれば基準米價は基準時の米價即ち一一・八一をとる事になる。是で前掲の式

$$\text{率勢米價} = 11.81 \times \text{米價率の趨勢値} \times \text{一般物價指數}$$

となる譯である。

三、趨勢の話

凡ての社會經濟現象は孤立的のものでなく前後左右にそれと連環のあるものであつて、之を時間的に相當數量に亘つて觀察すれば、其處に一定の形と傾向とを探知する事が出来る。換言すれば時の進展に連れて變動する現象には大抵趨勢的變化を包藏してゐるといふ事になる。經濟統計は種々な綜合的原因に支配せられて變動を示すものであるが、其の主なる原因は週期的及趨勢的なものである。統計的加工——統計數字を必要に應じて適當に處理して其の變動の原因を抽出認識する事が最も必要である。經濟統計の永年の傾向——趨勢

を知る必要の如何に多いかは云ふ迄もない事であつて、此の目的のために、統計数字の表は複雑な變動から他の原因を除去して趨勢的變動のみを残留せしめるのである。

例へば米價の一般物價に對する比率即ち米價率に就いて見るに、各月別に此の率を算出して其の年平均を求むれば、米價率が一年間に繰返す週期的な變動を除去し得て、年平均を永年のに眺めた時、其處に或る一定の趨勢を抽出し得るとするが如きである。

複雑な變動の奥に潜むと考へられる趨勢的變動を圖にしたものが趨勢線である。それは適當に加工された統計数字を表する圖表上の各黒點の間を最も公平に貫くものである。趨勢線を決定するには色々な方法がある。其最も簡單なものは目分量で引く手描法であり、移動平均に依る方法もあるが正確に趨勢線を決定するには數學的方法に依るべきである。

統計数字を圖表上に點出した時夫自身已に趨勢線を形成するものである。然し乍ら趨勢線の目的とする所は過去の變動状態から最も近い將來の有様を豫想せん事にあるので従つて趨勢線としては最もよく其の趨勢を代表すると同時に、之を

時の函數として簡單に表現し得るものでなければならぬ。數學的に複雑な計算を實行して各種の趨勢線を求めるのも要は將來の豫想を前提とするのである。

數學的方法に依つて趨勢線を引くに當り直線に依るか幾何線に依るか或は又高次曲線に依るかの問題を生ずる、又趨勢線が果して良く統計數列を代表してゐるかを吟味する必要が生ずるのであるが茲では所謂趨勢線といふのはさういふものであると云ふ事だけを述べて置く。

四、趨勢直線

時の級數をなす統計数字の趨勢に直線を當て嵌めるのが適當な場合が多い。

直線の方程式は $y = mx + b, \dots \dots \dots (1)$

の形で表はされるのであつて m は其の方向を示し b は其の直線の上下の位置を決定するものである。直線は此の m と b とに依つて決定されるもので即ち直線を決定する事は此の二個の未知數 m と b とを定める事である。

趨勢直線を統計数字の中に潜む眞の發展を時の函數として表はしたものとすれば、各々の時に於ける統計数字を觀測値

と見ると

$y_1 = mx_1 + b, y_2 = mx_2 + b, y_3 = mx_3 + b, \dots \dots$

の如く未知數 m, b 二個に對して二個以上澤山の方程式(觀測方程式)が得られる。 y_1, y_2, \dots は統計数字(觀測値)で x_1, x_2, \dots は連續した年次である。

未知數の數よりも多い聯立方程式は代數では解けないのであつて、此の場合に於ては m と b との値は各方程式を最も公平に満足するものでなければならぬ。而して m と b との最も確からしい値は最小自乗法に依つて決定する事が出来る。 m, b の最も確からしい値は確率論の示す所に依れば眞の値と觀測値との間の差(偏差)の自乗の總和が最少になる時に與へられるものである。 y を觀測値 y' を眞の値とすれば偏差 d は $y = mx + b$ であるから、

一般に $d = y' - y = y' - (mx + b)$

偏差 d の自乗の總和 $\sum d^2$ は

$$\sum d^2 = \{y'_1 - (mx_1 + b)\}^2 + \{y'_2 - (mx_2 + b)\}^2 + \dots + \{y'_n - (mx_n + b)\}^2$$

$\sum d^2 = \text{最小}$
なる時の m, b の値が最も確からしい値となる。それで最も確からしい値を求める方法を最少自乗法と呼んだのであらう。 $\sum \{f(m, b)\}^2 = \text{最小}$ から微分學に於て計算を行ふと m, b の値を得る。

$$\left. \begin{aligned} \sum (xy) - m \sum (x^2) - b \sum (y) &= 0 \\ \sum (y) + m \sum (x) - nb &= 0 \end{aligned} \right\} \dots \dots \dots (2)$$

統計に應用する場合に於ては x は年次、 y は統計数字、 n は年次の數である。

趨勢直線に於て偏差 d の總和 $\sum d = 0$ である。

然し $\sum d = 0$ 即ち正、負の偏差の代數的和が零になる様な眞線は一個に限らない、無數にあり得るそれは

$\sum d = \sum \{y' - (mx + b)\} = 0$

の式の示す通り未知數 m, b に就いて方程式は唯一つであるから、之を満足する、 m, b の組は無數に存在するわけである。

即ち偏差の代數的和が零になる様な直線は無數にあるので

あるが、其中偏差の自乗の總和が最少となる様な直線が其の級数の趨勢を最もよく表現するものである。

次に、米價率の趨勢直線を算出して見やう。其の前に、直線の公式と未知数の決定式とを再掲する。

$$\text{直線の公式 } y = mx + b \dots\dots\dots (1)$$

$$m, b \text{ を決定する式 } \left. \begin{aligned} \sum xy - m \sum x^2 - b \sum x &= 0 \\ \sum y - m \sum x - nb &= 0 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (2)$$

五、米價率の趨勢直線及其趨勢値

原點を大正四年度にとる。

(一) 昭和五年度

計算表から (第一表米價率の趨勢直線計算表)

$$\sum xy = 10,908$$

$$\sum x^2 = 2030$$

$$\sum x = 0$$

$$\sum y = 31,940$$

$$n = 29$$

を得て、(2)式に代入して

$$10,908 - 2030m - 29 \times 0 = 0$$

$$31,940 - m \times 0 - 29b = 0$$

から m, b を求めると、

$$m = 0.0053734$$

$$b = 1.10138$$

を得るので昭和五年度の趨勢直線は

$$y = 0.0053734x + 1.10138 \dots\dots\dots \text{昭和五年度の趨勢直線}$$

となる。

こゝで昭和五年度の米價率の趨勢値は此の式に於て

$$x = 15$$

を代入して計算したりの値である。

$$y = 0.0053734 \times 15 + 1.10138$$

$$= 0.08060 + 1.10138$$

$$= 1.18198$$

$$= 1.182 \dots\dots\dots \text{昭和五年度の米價率趨勢値}$$

(二) 昭和六年度

計算表から

$$\sum xy = 29,298$$

$$\sum x^2 = 2255$$

$$\sum x = 15$$

$$\sum y = 33,166$$

$$n = 30$$

を得て、(1)と同様に計算すると

$$m = 0.0056574$$

$$b = 1.10270$$

を得るので昭和六年度の趨勢直線は次の如くなる。

$$y = 0.0056574x + 1.10270 \dots\dots\dots \text{昭和六年度の趨勢直線}$$

こゝで昭和六年度の米價率の趨勢値は此の式に於て

$$x = 16$$

を満足する時の y の値である。

を引くのである。

になる。

趨勢直線を引くには二點を決定して其の間を連結すればよ

いのであつて、 $x=0$ の時の y の値と、今一つ x に任意の値

を代入して計算したりの値とを圖上に點出して之を通る直線

を引くのである。

$$y = 0.0056574 \times 16 + 1.10270$$

$$= 0.09152 + 1.10270$$

$$= 1.19322$$

$$= 1.193 \dots\dots\dots \text{昭和六年度の米價率趨勢値}$$

昭和五年度及六年度の趨勢線を引いて見ると第一圖の如く

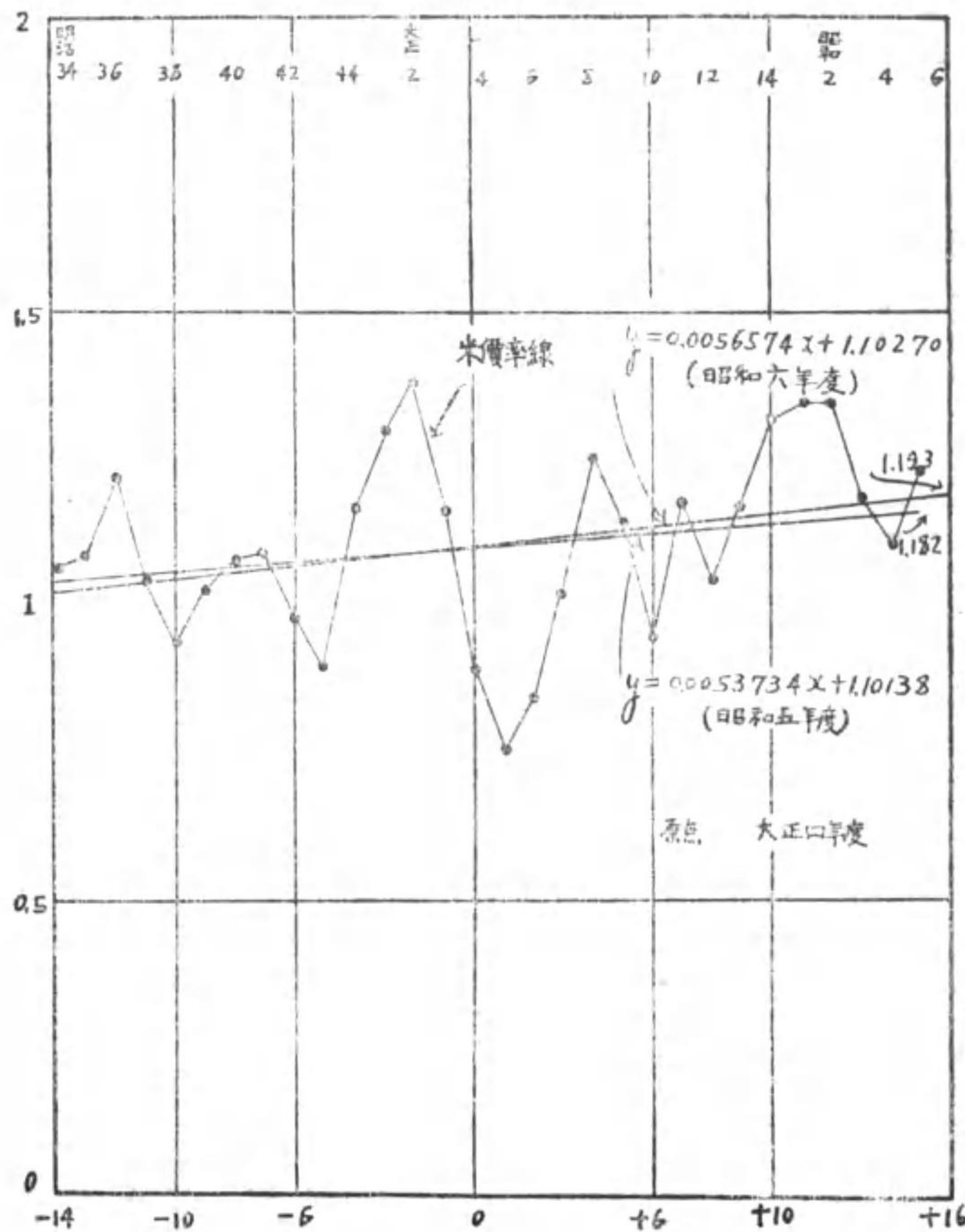
第一表 米價率の趨勢直線計算表

年 度	米價率 (y)	年度 (x)	x ²	xy
明治34年	1.067	-14	196	- 14.938
35年	1.089	-13	169	- 14.157
36年	1.217	-12	144	- 14.604
37年	1.041	-11	121	- 11.451
38年	0.933	-10	100	- 9.330
39年	1.032	- 9	81	- 9.288
40年	1.078	- 8	64	- 8.624
41年	1.093	- 7	49	- 7.651
42年	0.981	- 6	36	- 5.886
43年	0.897	- 5	25	- 4.485
44年	1.166	- 4	16	- 4.664
大正 1年	1.294	- 3	9	- 3.882
2年	1.386	- 2	4	- 2.772
3年	1.159	- 1	1	- 1.159
4年	0.855	0	0	-112.891
5年	0.752	+ 1	1	+ 0.752
6年	0.837	+ 2	4	+ 1.674
7年	1.024	+ 3	9	+ 3.072
8年	1.255	+ 4	16	+ 5.020
9年	1.142	+ 5	25	+ 5.710
10年	0.937	+ 6	36	+ 5.622
11年	1.177	+ 7	49	+ 8.239
12年	1.038	+ 8	64	+ 8.304
13年	1.173	+ 9	81	+ 10.557
14年	1.317	+10	100	+ 13.170
昭和 1年	1.344	+11	121	+ 14.784
2年	1.345	+12	144	+ 16.140
3年	1.179	+13	169	+ 15.327
4年	1.102	+14	196	+ 15.428
5年	1.226	+15	225	+ 18.390
				+142.189
				-112.891
				+ 29.298

備考 此の計算表は昭和六年度の方である。

此の表の各行から最後の欄即ち昭和五年度の数字を省くと昭和五年度の趨勢直線計算表となる。

第一圖 米價率の趨勢直線



各年度に互つて米價率の趨勢値従つて其の年度の率勢米價を算出して之の上値二割及下値二割に相當する價格を算出して之と米價とを圖表上に點出して見ると大体に於て過去の米價は率勢米價の上下二割の範圍内に納つてゐる事が分る。

之を要するに率勢米價は過去に於ける米價及一般物價に關する統計的研究を將來の米價に推定したるものであつて統計數字を將來の政策に生かさんとしたる統計の重大なる機能を現實に表現して居るものである。

統計の現状と將來

此の小論は一九三〇年三月廿五日、トロント大學に於けるコラッド・ジニー教授の講演の翻譯である。氏は現在、ローマ王立大學統計學教授、伊太利中央統計局長官である。

各方面の科學を、夫々其の分化發達の跡に就て觀れば、事實の蒐集と理論構成との間に激潮とした交替繼起のあつたことが分る。此のリズミカルな運動は宇宙諸力の推移の説明として殆ど支配的なものと考へられるのであるが、各種の科學上の革命は、蓋し此の運動の埒外に一步も踏み出すものではない。

生理學の方面に見れば、ラマルクとダーウインの名を聯想する素晴らしい理論建設の時代は、極端な迄の觀察、實驗の時

代に引繼がれて、近時更に其の科學的体系の構成を希ふ新しい熱情に驅られてゐる。

物理學と化學に於ても亦、原子説が公式化された後、暫時は實驗を離れた主觀理論が思惑されたのであるが、今日では實驗が新体系の構成に其素材を提供してゐるのを見る。

統計學も亦、此の一般諸科學の普遍な方則に自ら従ふものであるが、其のリズムの急調な點で特異性を示してゐる。事實、蒐集資料の缺除乃至不適性は、其自身で、重要な理論部

門の發達に一つの刺戟を與へるものである。

統計方法は其の取扱上より次の五分類に分類し得る。

- (一) 資料の蒐集
- (二) 製表と分類
- (三) 大量現象の種々相の觀察
- (四) 資料及び觀察の結果の綜合、訂正、並に比較
- (五) 上記の方法による蒐集資料に歸納的、演繹的分析

方法の施用

さて、(一)及び(二)の發達の經路と(四)及び(五)の發達の經路とは、或意味で相關的である。蓋し、蒐集資料が詳細と明確とを缺けば缺くだけ(五)の統計的推理方法の重要性を増すわけである。就中(四)の資料の綜合、訂正、比較上に工夫を要することは、愈々緊密さを加へるものである。

實地調査の資料を缺く場合は、其の限りに於て、凡て推量統計は存在理由を持つ。會ては統計の全領域を占め、特に人口計算を主眼とした此の推計の領域は、調査資料が漸次廣範圍に互りしたため、相對的に自己制限をしてゐる。乍併、漸次に人口推計以外の領域に適用される機會が多くなつて、現に

國富統計、國民の收入統計の計算に屢々見る所である。此等は直接の調査資料を缺くため、各國殆ど推量統計に據らざるを得ざる所である。このことは各自が最高度の發達を僭稱して憚らない所以でもある。

資料蒐集の制限性の故に、統計方法の今一つの據り所は曲線の解析である。吾々は二つ又は二つ以上の曲線を構成して合成曲線を決定する方法が専門化されんことを希ふ。乍併個々の場合に其の區別すべき特性が明瞭に觀取され得る場合はかかる綜合手段は忌避すべきである。蒐集資料間の相違が出る鱗目な性質のものであるか否かを見んとする幾多の研究調査は觀察の範圍を狭く限定した場合にのみ正當に爲し得る。このことは、標本調査を目的とする統計方法の根基とすべきでもある。

所謂補間法は資料配列の空隙を埋め、本來複雑極まるものを種類別に再分して其傾向を明瞭ならしむることを目的とするのであるが、資料の分類が詳細を極め、其の配列が完全される時は、最早存在理由をなくする譯である。同様に資料の豊富、分類の完全は各事象毎に孤立化した研究も可能となり、消

去法の使用、數個の關係の對立の如きものも自ら避け得られる。其他種々な天才的方法や、よき思付の方法が案出されてゐるが、これは資料の不健全性の存する限りに於てのみ、其の意圖は有意義である。(例へば各年齢別の死亡數を知らなくして存命表の作製を可能ならしむる方法の如きもの)とは云へ、資料の編制、分類の發達が他部門の統計方法を不必要にするに速断するものではない。此れに就ては若干の理由を述べて見よう。(イ)先づ文化程度の遅れてゐる國に於ては蒐集、分類せられた資料が尙幾多の缺陷や不備な點を含んでゐることは見易い事である。又完備した統計組織を持つ國でも、矯正すべき點のあることを念頭に置く可きであらう。統計を持つ國、持つても幼稚な段階に在る國は先づ統計組織の完成から出發すべきであらう。これには長い期間を要することである。(ロ)他方に亦、不完全な資料に基く觀察方法は

組織的觀察を受けてゐない新事實、新關係の發見を刺戟し、調査の新領域の必要を内省せしむる契機となつて、其の點で充分適用の理由がある。(ハ)資料の蒐集範圍が廣く、資料其物も正確であり、又分類も微細を極めて、尙統計便法の

適用の機會は有り得る。偶然事實の介入に依る影響を考量するための手續一般の如きは其の例である。完了調査の結果と豫想調査の結果との蓋然的差異を考量せんとする場合に於ける適用は看過出来ない點である。

同様に補間方法は完全な調査結果から現象の支配法則を見出さんとする場合、又研究の便宜上、綜合的に觀察事實の大量を表明せんとする場合、其の限りに於て、正しい利用の途がある。又觀察事項が量的制限を受くる場合、そのために侵入してゐる諸要素の影響を除くためには常に消去法に頼らざるを得ないこともあらう。(二)大量現象の種々相の觀察は幾多の發展餘地を存する部門であるが、觀察結果を處理する前掲統計方法の分類(四)と統計的推理の方法(五)との發達に照應して發達する性質のものである。(前法は後の方法に素材を提供する)例へば、一變動現象の概念と觀察結果及び分布度の不平等を統計方法によつて導けば偶然事實のために相關係數に影響する蓋然偏差を辨別せしむるの利がある。

さて、乍併、資料の蒐集、分類、製表の部門は大量の觀察、

結果の綜合、訂正、比較乃至理論付の諸部門より、其の發達程度は遅れてゐる。其の理由は、後者の發達は幾多の科學者によつて招來された所であるが、前者は今迄の所、大部分行政機關に依據されたままであるからである。而も各國とも科學者達は、從來、此の方面に無關心であり、關心したとするも、僅に臨機的に單なる相談者以上には出なかつたからである。かかる事態の齎す不利益には二つある。其の一は、前述の如く資料の蒐集、分類が今尙未發達の狀態に在ること、其の二は統計學に關する誤つた概念が愈々助長される結果になつたことである。此の誤つた概念は數學的訓練を強調する統計學者には、至極有勝な事實である。彼等は統計學を、其自身を目的とする形式科學であるとする見地に立つて、技術としては認めない。本來、彼等の種々な工夫は主として具体的事實への適應性と關聯して、又其の工夫から導き得た結果と觀照して價值判斷を下すべきものである。天才的方法の建設も、其の適用の不可能、少くとも其の困難性の故に、正當に統計學の職能を解する人達を失望せしめる。

茲に等しい結果を得る二つの統計方法があつて、其の複雑

さを異にする場合は、常により簡潔な方法を選ぶ。より複雑な方法によつて使用者が異常な技術的能力を示す機會を得るやうな場合でも其れを採らない。現在各方面に採られてゐる手段方法は皆此れと同軌である。例へば、天文觀測上の又實驗室内の各種の實驗は、其の手段の構成が複雑であり、天才的であるが故に價值付けられず、寧ろ其の適用の安易と有効との如何によつて採否が決められる。統計方法も亦同様に判斷せらる可きであらう。

統計學の目的を了解する者のモットーは「數學としての統計學、數學を背景とする統計學」ではなくて「可及的數學的方法を用ふることのない統計學」であるべきである。

とは云ふものの資料の編整、分類と、より精緻な統計方法との均齊を保持することはより洗練された統計方法の發展を期し得るものであり、特に、資料の蒐集、分類の階梯がかか均齊によつて利益されることは確實である。

此の目的達成のためには、統計局内でより廣範圍に科學者を雇用すべきである。單なる相談者としてでなく、直接に責務を負はしめて。統計局及び其の職能、共に擴張を見た今日

では、このことは一層必要性を加へ殊に統計科學の發達と相俟つて、技術的行政的統轄の衝に當る者のより非凡さが要求されるに至つた。

此の場合少なからざる困難が横はつてゐる。統計局は本來科學の局ではなく寧ろ行政官廳である。正確な資料の必要、分類上の諸要求は其れを利用する行政的な觀點から痛感せられる。従而、統計職員の見る資料は概して、より高度の職能への要具を提供するものとしてではない——例へば國民の出生、死亡の記録——此の目的は必要な行政的規準のための資料提供である。

尙又、資料の蒐集、發表に迅速を要することは各官廳は各々其の見る所抱く所により痛感してゐる點である。從來此の特殊目的のために、正確な統計觀察を犠牲とする結果を一般に招來してゐる。即ち、要求された程迅速な取扱ひは到底不可能であると分つてゐても敢てさうさせられて居る。

今日は、各國に於て、中央統計局の組織的完成を見、既に數ヶ國に於ては明瞭な喜ぶべき傾向を認め得られる。從來屢々疎通を缺き勝ちであつた各行政機關の聯絡統整も實現せら

れ、専門職員も終生を同一局内に留つて統計事務に奉仕してゐる。従而訓練も行届き資料の編整、綜合も良結果を結果してゐる。

茲に注意を要する點は、資料の蒐集が他の諸官廳に委託せられることである。此の組織は明かに歴史的な理由を持つ。即ち行政的目的を以て起ち、國家又は地方自治体の他の機能への附録として起つた理由によるのである。然しながらかかる組織の不便は明瞭であり、就中、最も不便を感じる點は中央統計局に於て統一解答すべき調査結果の統計が、實際上、他官廳に隨意的操縦の隙を與へてゐる點である。ソヴェート共和國の制度は此の種の弊害原因を除かんと意圖し統計制度は全く特殊の發展を見せてゐる。このことは、共產國家の特色と關聯して、統計資料が他の獨立自治体制の國に於けるよりも一層重要性を持つ所以によるのである。即ち統計資料が國民の經濟的繁榮の根基となり、責任となるからである。従而、統計事務は行政部門の一つを構成し、其の長官は人民委員會の一員である。

然し、もつと根本的な相違はソヴェート中央統計局が、其

の意志により、共和國全土に特別職能を有する軍隊を配置してゐる點である。其の目的は主として統計資料の蒐集であるが、之を他の諸國の例に見れば、他官廳又は地方自治体等の使用人の供する所に當る。前記ソヴェート共和國の採る制度の利益の點は明瞭であるが、不利益の點も同様明白である。此の不利益の點は、維持費の高くつくことである。事實、統計事業費は、ロシアに於ては、比較的多額を計上する國よりも五割方多く、事業費の最も僅少な伊太利と比すれば約六倍に相當する。此の他、多方面の統計記録の實際に精しく行政機構の運用に通ずる人物を多數に見出し得ない缺點がある。このために、行政的統轄の點から見た統計資料の缺陷に氣付き得ない憾みがある。

統計事業に對して政府の採る各種の手段が増加し、統計智識の普及が一般化するに至らば、ロシアの制度は其自身將來性を持ち得ないものである。假に現在の所、其の制度に利益の點があるとしても、尙採用を勸告し得るものとは考へな

ら。普通の統計組織を以てしても、重要な進歩を期し得ること

は不可能でなく、就中或方面には充分可能である。

先づ、資料蒐集上最も注意を要すべきことに關説しよう。煩瑣な方法の案出に頭を悩ます多くの科學者達が、自身の取扱ふ統計資料其物の缺點に思ひ到れば彼等の勞力の邪魔物を征服しよう。不正確である事例は、極く手近な資料にも存してゐる。例へば、年齢の發表に屢々見る如く、これは數へ年で答申される傾向がある。出生年月日の答申は、子供を若く見せるため其の年の終りに逆戻りして答申する國もある。又、死因、職業等は統計的統一の問題と關聯して種々な困難がある。就中最も困難な點は次の事實に依るものである。

元來、議論と云ふものは、假に或期間は人智の弛緩に乘じて去就は俄に定め難くとも、結局其の眞偽の點は明瞭となり得る。反之、統計に於ては、特殊の場合の他、計數の眞偽の點を辨別することは極端に困難だからである。尙又、數字資料は知覺に一種の幻惑を與へて、資料を作る者自身が其の缺點に氣付き得る唯一人でありながら、目の前の數字を金の粉末の如く考へ易い。古い言草であるが、石炭商の槓桿で測るべきものを、金細工師の秤皿に載せたがるのである。この適

例は醫者の場合に見られる。かの死因の申告に屢々起る不正確さは、彼等自身の責任でありながら、其れが統計數字として現れると、計數上の僅少な差違を以て、自身の衛生上、醫學上の説明に大きな證明を與へるもの如く譯もなく信じ易

い。上記の弊害は、國民福利への統計の奉仕を自覺し、其處より逆出する統計良心の普及、樹立によつてのみ除去し得る所である。同様なことが神意と呼ばれる公衆の良心に就ても言ひ得る。即ち實行への責任と利害關係とを持つ公衆の自覺に俟つ所以である。

さて、吾々の具体的な問題に歸つて、統計職員の自覺であるが、此れは中央統計局の指圖の下に特殊の訓練課程によつて興起せしめ得る。又統計刊行物に補助金下付の方法によつて、廣く統計資料の一般的利用性を高めることも結構である。或又、質問方法を適當に明示して一般公衆の申告に便ならしむるも良い。例へば年齢を尋ねる場合に生年月日を質問することを忘れない様にする如きである。これ等の管理は要するに答申資料中に在る缺陷の補正、誤謬の除去を目的とし

て統制管理せらる可きである。茲に統制の方法とは伊太利の如く地方廳によるか又組織の完備せる中央統計局によるかの何れかである。此等の統制の効果は明かに統制の衝に當る者の自覺に俟つ所であるが、云ふ迄もなく一中隊の慎重な統率者を見出すことは、一軍の慎重な編輯員を得ることより遙かに容易である。

決定的な進展を期待し得る他の分野は統計資料の分野である。行政上の目的を必至に考慮して、其の完了上に又瑣末な點に迄統計の奉仕を必要する限り、資料の分類は科學の目的にも、國內、國際の資料比較の便益のためにも、共に沿ひ得るものでなければならぬ。或方面（例へば犯罪、關稅の統計）に於ては、其の現象の推計が、他國民との比較上特に重要さを持つに至り、又一般に此の傾向は漸次助長されて來た。かかる比較性の問題を深く追求する國際的機關が一層不可欠なものとなつた所以である。

國際的比較が其の重要さに於て如何に大であつても、統計資料を國民の科學上の急務と聯結せしむることは一層重要である。從來、各國共に、評議會、特別委員會の方法により、

又アカデミック統計學の無比の先達によつて幾多の忠告を與へられて來た。而も尙希望する完全さまでは依然として到達し得ないのは何故か。敢て驚くには當らない。事實、大變屢々行政機構の無智、其の財政的要求への缺慮、實行的精神の生來の缺除、乃至は前述したる統計方法論を純粹形式科學と觀念する其の種の職業的變形……の故に、彼等の提案は實行の點から離れること遠く、假に傾聴すべき原理を含むにしても、恐ろしく不生産的である。

統計に於ける他の側の進歩の基底は、蒐集、分類せられた資料の、より完全な科學的編纂に存する。此の點では統計局に期待すべきである。建築材量を點檢し、其れに精通し、而も材量の使用であり、材量の良き認識者である統計局は、外部から眺めて皮相な智識しか持たない立派な統計學者よりも、一層良き利用者であり得る。このことは自然、統計局が蒐集材量を科學的報告の形で示し得る職員を持つべきことを豫想せしめる。確に中央統計局の最も普通な缺點の一つは、かかる職員を持たないことである。然し、これは主義として望ましく、實現はなか／＼困難である。

前述した所は要するに、資料の蒐集と統制とを慎重ならしむること、及び其の詳細な科學的分類と完全された編纂の利益に就て述べたものであつた。茲に統計に對する他の要求によつて、其等の利益が悪く調停されることがある。此の點は屢々無視せられる所であるが、即ち發表の迅速と云ふ要求である。統計の發表が遅延すれば官廳人と商人——兩者が統計の消費者として明かに二つの範疇を代表する——は統計の興味を全然喪失する。(此の場合には、統計の貢獻を主として財政的見地から見たので此の限りに於ては、第三の大きな範疇即ち科學者の場合は殆ど考慮に入れなくてよい) 上記の缺點の解決策としては資料の蒐集と綜合とを統計的に組織化するより良策はない。商人と官廳人とに關係ある實用的記録に限つて、結果速報を可及的匆急に發表し、科學的な分類、綜合、説明は後日發表するのである。此の制度は既に伊太利に於ては出生、死亡、結婚等の統計に實施してゐる所で、今年よりは移民統計にも此の方法を採ることにしてゐる。概畧の資料を月々蒐集し、其の翌月には伊太利全人口及び地方別人口の種々な變化を知り得るやうにしてゐる。尙、詳細分類の

資料は當年年度終了後五、六ヶ月以内に發表し、最後に決定的報告は専門家の手によつて圖表化するのであるが、これが完成は少くとも一ヶ年後になる。人口の綜合センサスにも、此の主義を採つてゐる。主要な資料は其の年中に發表するが、詳細は特別な係員の嚴重な注意の下に後日發表し、恒久的記

録とするのである。惟ふに、統計は惨めな過去に生ひ立つた。然し洋々たる將來がある。越し方の暗さを持つて行く方に希望のあけぼのを見るもの總てが然る如く、統計も亦、征服すべき幾多の難關を控へてゐる。

諸外國收穫播種狀況

在羅馬萬國農事協會に到達せる收穫豫想報告に依り本年度世界穀物收穫結果概況は今や完成せるを以て小麥、大麥に關する世界收穫程度は可なり正確に決定する事が出来る。小麥に就ては本豫想は北半球に於ける諸國を悉く包括して居る。此等は露國及び支那を除けば何れも小麥生産國として重きを成して居る。此等豫想總收穫高(八三一、〇〇〇、〇〇〇ドツベル、ツェントナア)に依れば、本年度の北半球諸國の小麥收穫高は、ただ一九二八年及び一九二七年の豊作(此の二ヶ年に於ける收穫高は夫々八九三、〇〇〇、〇〇〇d)

八三八、〇〇〇、〇〇〇dに及んだ)に劣るのみである。ライ麥の今迄に判明せる世界收穫高豫想は(ソビエト露西亞を除き)前年の二五一、〇〇〇、〇〇〇dに對し二四八、〇〇〇、〇〇〇dである。此の報告は、露西亞を除くのみであり、殆んど完全せるものなるを以て、大戰後に於ける最高の收穫高を示せる前年及び一九二五年度の數字と比較するも大過ないであらう。

大麥及び燕麥に就ては、北半球諸國に關する現在の收穫豫想は世界産額に對して大麥八九%——燕麥九〇%——露西亞

備考 (1) 早播玉蜀黍 (2) 自一九二四年、一九二六年至一九二八年平均 (3) 一九二九年及び一九三〇年は調査法改正のため比較不能とす

穀物の秋季作況に就ては報告は概して區々である。歐洲の南部諸國(露西亞を含む)にあつては、暴風雨の襲來後各穀物の作況は一般に有利な進捗を遂げたが、西部諸國、特に佛蘭西にあつては、先般の豪雨のため、大半は發育を阻止された。合衆國に於ては小麦栽培面積は略々八〇〇、〇〇〇ヘクタール減少した。

印度に於ては北部地方に未だ充分なる土壤の濕潤なきため小麦が従來の栽培面積を維持するや否やは疑はしい。本年度の玉蜀黍收穫高は萬國農事協會の統計に依れば歐洲の收穫高は前年の一七九、〇〇〇、〇〇〇、自一九二四年至一九二八年平均の一三九、〇〇〇、〇〇〇に對し一四五、〇〇〇、〇〇〇と豫想されて居る。此の豫想の結果、本年度の歐洲に於ける玉蜀黍收穫高は全体として最近に於ける平均を越ゆるものとなつた。玉蜀黍の最主要生産國たる合衆國に於ては豫想收穫高は約一六、〇〇〇、〇〇〇の増加を來し、五二〇、〇〇〇、〇〇〇となつた。尤も前年及び自一九二四年至一九二八年平均の七四、〇〇〇、〇〇〇に對し九、三二〇、〇〇〇、〇〇〇と豫想されて居る。北亞米利加の豫想高を合するならば、本農業年度の砂糖總生産高は前年の九、三二六、〇〇〇、〇〇〇、自一九二四年至一九二八年平均の八、四七七、〇〇〇、〇〇〇に對し一〇、五二二、〇〇〇、〇〇〇、即ち夫々略々一三%、二四%の増加を示す事になる。

葡萄生産は本年度は歐洲重要生産諸國に於て遅延して居る。此れは特に西班牙に於て甚だしく、同國に於ける本年度の葡萄收穫高は前年の二五、〇〇〇、〇〇〇ヘクタールに比し僅々一、六六六、〇〇〇ヘクタールに過ぎず、實に三

年平均に比せば夫々約二二%、二四%の減少を示して居る。

馬鈴薯の收穫に關しては(比較的重要なならざる生産諸國を除く)三主要生産國(獨逸、波蘭、チエコスロバキア)の數字が判明して居り、前年に比せば波蘭及びチエコスロバキアは夫々八・八%、二三・五%の生産減少を來して居る。獨逸に於ては豫想收穫高は一九二九年に比し約一〇・五%の増加を示して居る。此の豫想には露西亞を缺如せる以外に更に第四位の馬鈴薯生産國として重きを成せる佛蘭西の數字が缺けて居る。佛蘭西に於ける收穫高が最近五ヶ年平均に達するものと假定すれば、前記の一九三〇年度豫想の結果として、歐洲諸國(ロシアを除く)の馬鈴薯收穫高は判明する。此れは前年度の大豊作より約六%の減少を示してゐる。併し自一九二四年至一九二八年平均生産高を越する事略々一〇%に及んで居る。合衆國に於ては本年度の豫想は前年度の結果と略々同一の域に達して居る。

甜菜は獨逸に於ける豫想及び本年度の歐洲に關する佛蘭西

三・四%の減少を示して居る。佛蘭西及び伊太利に於ても同様に減少が豫想されて居り、しかも後者にあつては一九二九年及び前五ヶ年平均に比し夫々五%、九%の減少を來して居る。中央及び東部歐洲諸國に於ては作況は最近多少良好となつた。概して少くとも正規の收穫高は豫想されて居る。尤もペロンスボラの大被害を數地方に互りて受けたギリシヤは除いてではあるが。

本年度の收穫面積に關する最近の報告に依り概して歐洲の收穫高は減少すべしとの豫想が確證されて居る。本年度收穫高は前年及び自一九二四年至一九二八年の五ヶ年平均に比し減少を示して居る。唯エストニアに於てのみ豊作を見る可く、既に一九二九年及び前十ヶ年平均收穫に比し、夫々一・九%の増加を示して居る。露西亞に於ける亞麻栽培面積に就ては第一回報告が發表された。此れは前年に比し約五・七%の増加を示して居る。

繭生産高(昭和四・五年)

* 昭和四年

總數	春		夏		秋	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
總數	101,000,000	3,000,000,000	50,000,000	3,000,000,000	50,000,000	3,000,000,000
北海	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
青森	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
岩手	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
宮城	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
秋田	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
山形	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
福島	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
茨城	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
栃木	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
群馬	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
埼玉	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
千葉	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000

總數	春		夏		秋	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
總數	101,000,000	3,000,000,000	50,000,000	3,000,000,000	50,000,000	3,000,000,000
東海	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
神奈川	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
新潟	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
富山	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
石川	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
福井	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
山梨	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
長野	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
岐阜	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
靜岡	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
愛知	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
三重	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
滋賀	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
大津	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
京都	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
大阪	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
兵庫	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
奈良	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000
和歌山	10,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000	5,000,000	300,000,000

昭和五年農産物産額減少調

農林省統計表からの調査に依れば昭和五年に於ける我國農業生産總額は、二十六億四千七百八十八萬五千圓であつて之を昭和四年に於ける同價額の三十九億二千八百八千圓に比すれば實に十二億五千二百四十萬圓三千圓、三割二分といふ激減となる。以て未曾有の豊作が恐慌的不況に喘いでゐる農村に與へたる打撃の如何に深刻なるものがあつたかが窺はれる。洵に豊作饑饉とは我國現下の農業状態を示すパラドツクシカルな言葉である。殊に蠶糸價下落の養蠶收入に及ぼしたる影響の激烈なるに至つては如何なる超特級の形容詞を以てしてもその實相を傳へる事が出来ない。而して其の數字は別表の如くであるが、但し之を以て農家の収入減と即断してはならない。何となれば右は農林省統計表に現はれた農産物丈の價額で我國農産物の當該年中の總價額ではない。而も各種農産物の生産總量の幾何が販賣せられるか不明であるばかりでなく、諸物價の低落に依り農業經營費及農家々計費の減少も相當の額に上るが故に農家の實際収入減は之等を差引き考へなければならぬ。

	生産總價額		昭和四年に對する昭和五年の増減		備考
	昭和四年	昭和五年	減少額	割合	
米	1,584,575	1,103,419	481,156	30%	(1) 農林統計に依り米麥養蠶以外のものは昭和五年の數字未詳なるに依り假に其の生産額を前年と同一なりとし價格は昭和四年及五年中の當該生産物の出廻最盛期に於ける卸賣價額の下落の割合に依り算出せり (2) 畜産に付ては數は昭和三年の統計に依り價額は主として物價指數の下落割合に依り算出せり
麥	271,099	203,262	67,837	25	
其の他の農産物	198,951	141,096	57,855	29	
果實	81,798	51,533	30,265	37	
蔬菜及花卉	255,475	139,489	115,986	45	
工藝農産物	109,961	83,131	26,830	24	
製茶	30,472	27,425	3,047	10	
綠肥用作物	29,803	21,157	8,646	29	
農産關係副業	262,221	215,048	47,173	17	
養蠶	655,001	304,244	350,757	54	
畜産	420,932	358,081	62,851	15	
合計	3,900,288	2,647,885	1,252,403	32	

産地	米	麥	其他農産物	果實	蔬菜及花卉	工藝農産物	製茶	綠肥用作物	農産關係副業	養蠶	畜産	合計
沖鷹	三、八〇〇	一、一〇〇	一、二〇〇	一、三〇〇	一、四〇〇	一、五〇〇	一、六〇〇	一、七〇〇	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇
宮大熊長佐	一、一〇〇	一、二〇〇	一、三〇〇	一、四〇〇	一、五〇〇	一、六〇〇	一、七〇〇	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇
福高愛香徳	一、二〇〇	一、三〇〇	一、四〇〇	一、五〇〇	一、六〇〇	一、七〇〇	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇
山廣岡島鳥	一、三〇〇	一、四〇〇	一、五〇〇	一、六〇〇	一、七〇〇	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇
和奈兵大京	一、四〇〇	一、五〇〇	一、六〇〇	一、七〇〇	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇
滋三愛靜岐	一、五〇〇	一、六〇〇	一、七〇〇	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇
兒	一、六〇〇	一、七〇〇	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇	二、七〇〇
歌	一、七〇〇	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇	二、七〇〇	二、八〇〇
細島	一、八〇〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇	二、七〇〇	二、八〇〇	二、九〇〇
崎分本崎賀	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇	二、七〇〇	二、八〇〇	二、九〇〇	三、〇〇〇
岡知緩川島	二、〇〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇	二、七〇〇	二、八〇〇	二、九〇〇	三、〇〇〇	三、一〇〇
口島山根取	二、一〇〇	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇	二、七〇〇	二、八〇〇	二、九〇〇	三、〇〇〇	三、一〇〇	三、二〇〇
山良庫阪都	二、二〇〇	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇	二、七〇〇	二、八〇〇	二、九〇〇	三、〇〇〇	三、一〇〇	三、二〇〇	三、三〇〇
賀重知岡阜	二、三〇〇	二、四〇〇	二、五〇〇	二、六〇〇	二、七〇〇	二、八〇〇	二、九〇〇	三、〇〇〇	三、一〇〇	三、二〇〇	三、三〇〇	三、四〇〇

新刊紹介

ホイット氏著「富の消費」

Elizabeth Ellis Hoyt:

The Consumption of Wealth

本書全巻を通じて概畧を述べれば次の如きものである。

先づ第一に消費問題と文化發展との關係から出發し、消費問題が我々日常生活と最も密接なる關係を有するもので一般人士の片時も念頭を離すべからざる重要な經濟の一部門を占むるものであることを述べ特に産業革命後消費分配問題が生産問題に代つて重要な地位を占むるに至つた由來を詳述して居る。次で欲望の由つて生ずる心理關係の解釋を下し文化の意義を明かにし多くの文化の普及状態を述べ、次で生産と消費との因果關係相互關係より物價、價格問題に及び收入の分配と消費との關係を説明し、我々の幸福安寧に對する欲望の統制法及其程度問題に解釋を與へて居る。

六四

最後に人口問題を提供して消費問題との關係を詳論し、亞米利加の財貨消費の現状につき詳細な説明を加へてをる。次に本書の内容に就ての極く概畧の紹介を試みる事とする。

第一編 緒論

消費と文化

天國の科學社會から地球に向つて其の文化を研究する爲一人の科學者を送るといふ假想より始まる。

先づ第一に其の科學者を驚かすことは、一小地球上に思ひ思ひの相異なる生活法式の多いことである。亞細亞に來ては支那に於て今より五千年も昔に外部よりの攻撃を防ぐ爲に築かれたる大城壁といふ古代の威嚴ある文化が輝いて居る。更に印度に於ては種々の相異なる生活法式を見出す。歐洲に來ては其生活法式を見るに自然力を左右し自然物資を自由に變形して自然を支配せんとの努力が認められる。亞米利加に於ては最も活動的にして其の富の大なること驚くべく其の生活法に至つては軌近著しく進歩したが、今尙其の富の消費技術に關しては進歩遅々たるものがある。消費の問題は經濟學の三大部門の最後に發達したのであるが生産の問題は産業革命

時代に於て著しく其の發達を見、七十五年間經濟學界を風靡してゐた。而して十八世紀の末に至つて人々の實際的の注意は財の分配問題に移つて來た。一八四八年社會主義の發展と共に分配問題は益々其の頭を擡げるに至り、斯くてミルの時代より今日に至る迄分配論考究の興味は理論經濟學に於て生産論に打ち勝つて來た。

大戰始つて以來九年の間に亞米利加洲の購買力は約二五%も増加し此れに伴ひ消費方面に實質的の變化が起つた。

何れの時代に於ても多くの人々は、より大なる富を求めて居るが、特に最近注目すべき事柄は人間が生産に依り大なる報酬を得んとするよりも又分配により大なる分け前を得るよりも、得たる金の利用消費の方法に注意を向けるに至つたことである。

財貨の種類少き限りに於ては財の利用方法や消費方法に付きかれこれ撰擇する事は困難である。之が爲に消費論研究の發達が比較的遅れたのである。從來消費論研究の發達の遅々たる一因は財の生産及び分配が非個人的に又は廣く社會的原則に基き思考され得るが之に反し財の消費が全く個人的

もので夫れ々異なる消費者の嗜好、特性の如何に由るものであるとされて居た、なる程消費は個人的特性に由ること生産及分配以上ではあるが、殆んど其れに由らぬ場合もあり、又消費も一般原則に基くこと大である。唯かかる原理及法則を包含する各種の科學が此等の點に於て發達してゐなかつた爲に我々が其の原理法則を見逃して居たのである。其れ故に消費論の科學としての發達の遅れたことに對する重要な理由は消費の基く各種の科學及び智識の發達の遅れたことに歸することが出来る。我々は他國民の財の使用に對する重要な經驗を知る爲には他國民の文化、一般的生活法の見地及び彼等の態度に對する洞察力を要する。

此書に用ふるカルチュア一の一般的意味は人類の一大グループと他の大グループとの區別の標準をなす生活様式である。單に信念、習慣、貨物及び消費せられたサーピスの綜合にあらざる一の組織を有するのである。

今や相異なるグループ、國民の消費問題の研究が論理的に行はれる。出來得べくんば消費の evaluation に付て最大限の満足が得らるゝ迄に考察するを要する。

六五

個人的にせよ社會的にせよ人類心理學は欲望の由つて生ずる又消費の由つて發生するメカニズムを提供する。欲望は人類が勿論の事として承認し分析して止まない所の生物學的環境の要素の影響を受ける。我々が the field of cause を吟味検査した場合には我が國民及他國民の消費を容易に理解することが出来る。

第二編 消費に關する心理

我々は心理學を學んで外界の印象を腦髓に傳へる神経系統の存することを知つて居る。其の印象は外部の感覺機關から腦髓にと一定の道程を経て入つて來る。腦髓に於ては其印象は多少自覺的に生活色彩を帯び知識の一部分となり、又は廣義の利益の一部を形成する。神経系統に由らずしては刺戟を腦髓に決して傳へない。神経系統の作用上の知識は human interest の研究に一の光明を與へる如く思はれる。

此の世は可能的利益に満ちて居るが其れが感覺に來るのは甚だ遅々たるもので一度内部に入込めば綜合せられる道程は甚だ狭く且特殊的のものである。

心理學の研究により其特殊性を知ることが出来る。

集團生活が各メンバーのインテレストに及す刺戟

集團的社會生活を營む人々は荒蕪たる島嶼に住する人々と其の行動、事情を異にする。彼等は互に相似寄つた生活をすべく刺戟せられ、又社會的束縛により大にハンディキャップづけられる。彼等は隣人の有する所のものを欲しがる。集團生活を營む人々はお互の熱情と偏見とに左右せられる。

グループの觀念とインテレストはグループ内に直接感染し、新しき觀念とインテレストは仲々起り始めない。

グループ精神は第一に社會的に既に建設せられ受け入れられた新しきインテレストと同様の形態をとるものである。

第二にグループ精神は古きインテレストがグループの各メンバーの間に普及することを助ける。

競争心は明かにグループ生活の一現象である。一方に於ては同僚を追ひ越し他方に於ては足並を揃へて進むといふのが人間の欲求である。エミュレーションは殆んど如何なるインテレストにも影響する。物質的インテレストを以て充滿せる活動的社會に於ては殆んど總てのものに影響する。それにも拘はらず顯著に示さるるインテレストを入れ又は普及する爲

人間は實際的に一般動物が生れ乍らにして有する interest を越えた他の何等の特殊の interest なしに生活して來た。

習慣的興味に付ては初等心理學研究者が熟知して居る。習慣的興味の爲には常に推定がある。而も常に新しい道を開く新しい觀念に反する推定がある。習慣的興味が屢々境遇の變化と共に、人の移動することを如何に拒むかといふことは人間が一地方から他地方に移動する場合によく例證される。例へば人間は獲得に困難であらうとも昔からの慣れた食事に執着し新しい食物を口にすることを躊躇する。エスキモーはよく習慣に執着して來たとは *caribou-meat* 及び *seal-meat* の亂用を禁ずる法律を有して居る。

人々は注意を喚び起させられる様な何物かに對し充分なる興味の直接の反動を示す。諺にも「新奇が猫を殺した」とある。賢明なる両親は泣く子供をだましますかす一方方法としては何か新奇なものを見せてやる必要だといふことを知つて居る。然し新奇といふことそれ丈では猫にも子供にも大人にも興味を與へない。新奇といふことが單に目を惹くといふ丈の場合には興味は其新奇さを失ふに従つて消え去る。

に大に重要である。

第三編 不知の間に消費を左右する諸要素

人間の利益と地理的環境
人間がカルチュアアの發展に有利であると認めた地理的條件は、溫暖に過ぎず全く乾燥せる地方であつて其の周圍が自然的變化に富み人間の智能擴張の暗示に富める場所である事を要する。而して人類學者によれば原始的大カルチュアアの發源地は叢林地に非ずして高原地帯であつた。高原地帯に於けるカルチュアアは充分なる食物供給を受くる事が出來た。然し叢林地は如何に繁茂せる場合と雖も單調で種類變化に乏しかつた。又人間は地理的環境以上によく氣候に打ち勝ち自らを調節することが出来る。かくてカルチュアアと氣候との關係を述べてみる。即氣候は次の三つの方法に於て我々に作用を及して居る。

- 一、氣候は我々の嗜好品を生産するに重要な植物界、動物界に影響を及す
- 二、我々の肉体的必要物に影響を及す
- 三、我々のエネルギーに影響を及す

かくて又大カルチュアーは地勢により大に影響を蒙ることを述べて居り、經濟價值、自然的富源の種類が國民の消費特に二十世紀に於ける西洋の消費に及ぶ影響に付論じ其の例として北米合衆國、英國西歐羅巴の製造工業の例を擧げ近代西洋文明が石炭と鐵に根底を置くことを述べて居る。

人種

Race の意義に種々ありとなし其用法を二三擧げて居る。即 Race と云ふ語は一般に三大民族、即ち白色人、ニグロ族、蒙古人種に關して用ひられる。又三大民族のグループに關しても用ひられ又單に國民に關し用ひられることもあると述べてゐる。

カルチュアーの普及

時によつても唯一の文化の特徴が普及することがあるし又全文化が混同する場合もある。此文化の混同は大グループ又は全國民の移住並に戦争、征服及び軍事的政治的訓練等により大に影響を受けてきた。カルチュアーの混同を導いた有史前の國民の移住に付ては満足的に深く知る事は出来ぬ。此問題に付き試みられた最も興味ある研究として The Pulse of

Asia に於ける Ellsworth Huntington の研究を擧げて居る。これに於ては全國民をして充分食物の供給のある所を求めて移住せしめたる氣候の週期的變化に付て述べて得る。支那北部の廣大なる草原地方に於てミルクの使用が發達し亞細亞を横斷する移住通路によつて埃及、メソポタミヤへと其カルチュアーが運ばれた、其れより尙歐洲諸國にと擴まつた其他の大移住が亞米利加大陸、亞弗利加、大洋洲等の諸國に起つた。希臘の町に於ては食物の大饑飢が起つた場合には植民を人口少き地方に送るのを常の習慣とし、斯くして文化的接觸が擴まつた。羅馬に於ても亦同様であつた。

新世界に於ける西洋文化は勿論多くの文化の源より分岐したるものの結合したものである。其の根底は一部は英國、一部は西班牙、葡萄牙にあるが英國、西班牙は又大に他の文化、國民の移住に依る影響を受けて居る。人々は鐵道、船舶等の輸送機關の發明以前に於ては一グループより他のグループへの移動を餘り考へなかつた。此等のグループを接觸せしめる動機理由は種々あるが次の場合である。

一、一部落より追放され他の部落に避難する場合

に至り奢侈品は地球上の隅々に迄紹介せられた。都市間に行はれた貿易は主として奢侈品の交換であつた。我々は新しき階級の人々即銀行業者及び金貸業者の存在を見る。而して彼等は商業の發展に興味を有してゐた。此等の人々は舟を艤装し又金を借りて商業を擴張する爲、貿易業者を派遣し大に商業の發展に貢献した。英國及び大陸に於ける貿易會社の組織は亞米利加の發見により大に刺戟を受けて徐々ではあるが益々秩序的に進歩した。

斯くて消費上の大變化は産業革命時代に惹き起された。

製造工業に於ける經濟は機械により必需品の價格を下落せしめると同時に實質的賃銀を高め其れ故各人の生活程度は高まり其の消費を擴大するに至つた。工場組織の出現と共に消費擴張に於ける最も重要な人は貿易業者でも又其れに金融の便をはかる銀行業者でもなくなつて製造工業家になつた。大組織の製造工業家の最大限の成功は出来るだけ廣く其生産品を賣ることにある。新奇のものを造らんとして居る場合は其れを得たいといふ願望を起させねばならぬし、又古い馴じみのものを造らんとするならばより以上を得ようとの願望を起

二、航海中暴風雨の爲他の海岸に運ばれる場合

三、他地方を見物に出掛けたり冒險に對する動機、經驗、擴張の希望により刺戟される場合

商業とカルチュアー

現今消費に及ぶ多くの影響の中で最も重要なものは實業家が其商品を處理せんとする積極的努力である。此影響は昔に於ては今日程重要な意味を有してはゐなかつた。又新しきものは大に歓迎せられる事の例として次のことを述べてゐる。見馴れぬ奇妙なものを持つて市場地に入り来る野蠻風の服裝をした人間を想像し彼が其の商品を擴げると子供等は周圍に集り大人迄近寄つて来る、彼等は新しいものを得る爲に本國の生産品を與へに持つて来る。而して彼の商品は其使用が發見され廢棄せられる迄に其珍しさを失ふかも知れぬが兎も角も新しきものは歓迎される。

市場の歴史

組織ある市場の創設は商業の始めの時代に於ては多少偶然的であつたが、時の経過すると共に最も重要なものとなつた。貿易業者の活動により世界各所の富國民は其利益を擴張する

させねばならず其處で販賣法が科學的に發展し始めた。斯くて多くの新しき製造品が市場に於て相競合し結局は各生産者は其れに對し最大の智能と技術とを持たなければならぬ事となる。

生産と消費

如何なる程度に於て我々の日常生活が機械の發明により貢獻せられて居るかを述べ生産の増加と消費の向上關係を示し大きな發明も始めは一小部分の發明より起るものであるとの觀念の重要性を鼓吹し、發明がふとした動機から起るといふこと其の例として次の二つの場合を擧げて居る。

一、其の名を Dullely と呼ぶ青年がオックスフォード大學を卒業後父の鑛物工場を經營し鐵を石炭にて熔解することに成功したが、これが斯界に一新紀元を劃するに至る第一歩であつた。

二、James Watt と雖彼が或る快晴の日曜日散歩した時、其散歩中に世界の生産消費に一大改革を與へる主要方法の一たる觀念——蒸氣機關發明の基礎となり得る各個の凝縮室の觀念が思ひ起らうとは夢想だにもしなかつ

たであらう。

勿論生産技術の状態と消費量及其の型との間には直接密接なる關係が存在する。然しながら昔は實に産業革命時代迄は消費者が生産者を支配し居たる事現今以上であつた。生産者は消費者の嗜好の向く所を自ら想像し、之に向つて生産を進める。現今に於ては消費者は全く自ら新しき嗜好を想像する暇がない程である。

種々の生産状態に於ける消費に關する二三の觀察

最も原始的時代の人間は自足經濟を營んで居た。彼等は少しも組織的生產を有してゐなかつた。當時の消費の型として彼等は果物やミルク、イチゴ、又は最も容易に捕へ得る動物を食物とし、穴居生活を營んで居た。初めは着物を造る方法を知らず裸で居たのであるが、後に着物の消費が起つた。動物捕獲法の進歩と共に動物の皮革を衣服用、器具用、建築用に利用するに至り、これと共に更に自然の動物のみならず、養畜養魚が發達して來た。

次に殆んど總ての國民は早くより動物を馴らすことを覺え其の第一は大であつた。動物の飼養條件がよく農業に適しな

い様な土地に於ては牛の飼養が經濟上重要な地位を占めるに至つた。ここに於て牧畜業が盛に起つた。

其れと共に農業は著しく發達し、次に手工業時代に移り益々分業が盛になり消費高は急激に増加した。而して之に伴ひ生産は特殊の形態をとるに至つた。かくて一般に以前よりも物價は安くなつた。

次で今日の大組織動力工業時代に至り機械の發明利用が旺んとなり、爲に生産高を増加し物價は著しく低落し手工業者は失職するに至つた。又産業革命と共に國民の生活状態は全く變化するに至つた。

一例を米國にとれば米國に於ける現今普通の生活標準に於ては總ての家庭は新聞をとり、雜誌を読み自由に書物に接し得られ最も貧困なる人々でさへ自動車をも有して居るものが多く、又ピアノ、蓄音機、ラヂオを有する時代となつた。道路掃除人夫でさへ時計や萬年筆位有して居る状態である。

價格制度時代

價格制度は一種のメカニズムである。生産者と消費者はこ

の制度を通じて相接觸し兩者に對し大なるサービスをしてゐるわけである。

消費者に對するサービスは消費者をして欲望を起さしめ物品の獲得を容易ならしめてゐる。

物々交換が一時的のものであり、價格制度が全然無かつた時代に於ては消費は實に局限せられて居た。何故ならば消費者は己が欲するものを直に得ることも出來ず、又相對的の價格を知らなかつたからである。然るに商業の發展、貨幣制度、交換の媒介物の發展と共にこの問題は單純化された。

此の點に於て現今普及せる信用購買、月賦購買は大なる注意を惹き起す。これに依り直接消費の種類及其の高にも影響を及し Lump-sum Credit よりは Instalment credit の方がより効果が大きい。前者は一般に期間が短い。後者は消費を直接に刺戟する觀念と共に發展したものである。

然らば價格と需要との關係は如何といふに普通一般の原則に従へば價格騰貴すれば需要減少し、下落すれば増加する關係にある。即物價は需要の伸縮性により支配されるが例外的なものがあるとしてキナエンを擧げこの價格の騰貴は需要に

大した影響を及さぬ。即病氣の時はそれが一五十弗しても買ふし、健康の時は一トン一片でも買はうとしない。然しながら大部分の場合は前述した原則に依る。奢侈品に付ては殊に然りである。時にはパン、鹽、水の如き必需品でさへ其原則に従ふことがあると述べ種々の例を擧げて説明して居る。

収入の分配論

消費の限界は生産によつて示されると雖も生産より受くる満足は生産物の型や量の如何によるのみならず、生産物の價值分配の割合の如何にもよるものである。購買力の多くが僅少の極めて富裕なる人に赴くならば、それは總ての人間に平等に分配された購買力を有する問題とは全く異なつたものである。満足の合計は分配と共に變化するのみならず、消費される物品の種類及びサーピスと共に變化する。

然らば富の分配と収入の分配とは如何といふにこの兩者は稍々異つた問題である。

富とは經濟財の蓄積又は金錢、満足等を受けられる根源となる財貨又はサーピスに對する權利の蓄積である。収入とは金錢の流れ又は満足に對する資源の流れである。

富を有する者は誰でも収入があるとして一般に考へられるが富を有しながら収入のない場合も考へられる。即銀行破綻を恐れ、株券公債の値下り等を恐れ、其金を投資することを拒む人は富はあるが収入はない。が然し収入を得んと欲すれば直に得られる。金錢に於ても満足に於ても如何なる種類の収入をも生じ得ない所有は全然富とはいはれない。

収入の不均等

總ての者が己が手により己が生計を立てて行かねばならぬ單純な社會に於ては収入の不均等は夫として起らない。大なる分業が起るや否や収入の不均等が發生する。収入の大なる差異は多くの場合人々を支配者と被支配者とに分けることにより生ずる。

或る人が他の者より収入が多いといふことは必ずしも其の

者が他の者より能力が大であるといふことを意味しない。極めて有名な詩人と雖パン焼工場を處理經營して行くことは出來ないかも知れぬ。

第四編 消費者の統制に依る消費

思索の苦痛

最初の欲求は撰擇的のものである。而して試練及び誤れる幾多の經驗法によつて始めて決定されるか、又は捨てられるか何れかである。ここに解決さるべき問題があるならば人々は其の目的に達する迄はいろいろと試みる。例を擧げれば若し人間にして寒冷に襲はれたとする。其の場合に其處に洞穴と、林と、雪の山があつたとする。其の場合彼は先づ其寒冷を避けんとして彼は林に入つて見ては風の吹きまくることを知り、又次に雪の山に近附いて見ては其濡れることを知り、最後に洞穴に入り込んで以上の内最も此處が満足的な場所なることを知る。

かくて穴居の習慣を得、他の者は是を模倣して遂に穴居生活が一グループのカルチュアの一部を形成するに至る。或問題を解決しなければならぬ新しい立場にある場合に於

ては他の動物に於ても亦同様である。例へば狹苦しい箱の中の二十日鼠はとどかない所にあるチーズを得る方法を發見せんとあちらこちら走り廻り一度方法を見出せば、二度目には前程にはかけ廻らずに其れを得る事が出来る。

カルチュアは經驗の堆積によつて築かれるとはいへ其成功は極めて遅々たるものである。ある人間の眼識内に入り来るあらゆる新しきインテレストは少くとも一度は其れを導き入れた人によつて試みられたに違ひない。時間と經驗は良き教師なれど其生徒は常に其手中に於て死んでしまふ。考へ始める時の最初の僅かばかりの特殊のエネルギーが後には驚くべき助けとなるものである。

苟も人間にして其の立場を熟知して居る様な智慧のある人ならば靜に其行動に取りかかる前に、あちらこちらかけ廻る前に熟考する。僅かばかりの腦の經驗により筋肉の力を大に節約し得るわけである。若し人間にして前述の穴、林、雪の山を前にして其身をよせる所の撰擇に躊躇しつつかある場合其の人に於て曾て木に登つた經驗があれば小枝を通じて如何に風が吹きまくかを思出し雪といふものが如何なるものかを知

つて居たならば雪の山へ行かずに直に穴に向ふであらう。勿論思索に苦痛を伴ふことは拒み得ない。

幸福安寧に對する消費學

夢想が第一に來り、思索が第二に、實驗が第三に來る、而して哲學者の研究が實驗室の先に起る。

宇宙に對する好奇心は人間始まつてからのことであるが昔は人間は直接有用なる事實よりも抽象事實により多くのエネルギーを費した。即ち治療術の如く實際的問題を除いては星の運行、算術、物理の様な科學が始め最も注意を惹いたのである。

消費に付き應用せられたる科學と壽命

消費に應用せられた科學の最も著しき成功は人間の壽命を長くしたといふことであるとし、其壽命の増加率を詳細な例によつて示して居る。

消費に影響する科學の最初のもは藥物と關聯して居る。人間は昔から苦痛、病氣、死亡等と闘争する手段を發見することに苦んで來て居る。かくて醫學が大に發達したことを述べ、次に生活上の肉體的の喜びと題して人間が唯長生きする

ばかりが幸福ではない。それは人生闘争の半面であるとし、眞の幸福は肉體的健康にあることを詳細に力説して居る。

より良き消費への組織ある運動

消費者の爲め消費の統制は大略三つの方法に於て來る。

- 一、自己又は隣人の消費改善を圖らんとする無形式の個人又は團體的努力
- 二、社會全体を救済せんとする私的團體の組織的努力
- 三、政府の力に依る努力

を擧げ専門職業的社會、一般的社會等に付き其間の事情を説いて居る。

組織ある政府は消費に於ける有力なる權力の根源をなす。

政府は最も能率ある生活をなすべく消費者を教育する方法を提供する。又直接には消費者に大に安い品物を提供しサーピスを與へ有害なりと信する消費を禁じ、又之を調節すると述べ政府の消費者に對する補助干渉の状態を説明して居る。

政府が教育に於て活動する部分は總ての人の知る所であるとして、これに付ては大畧の説明を加へてゐるに過ぎない。

第五編、國民生活様式

カルチュアアの型

屢々哲學者の教訓として引用せられた象の批判に關する六人の盲人の異なる見解に付ての話を擧げ各其觀察點の異なるにより各其の見解を異にし、尙我々の知覺想像は自らの經驗的知覺及想像の範圍を越えぬものであるといつてゐる。

人間個人として眞實なることは又集團としての人間にも亦眞實なるものである。例へば現在シカゴ市に住居して居るミカヘル・オーブリエン及びジュリアス・クラインベルヒは各其人生觀を異にしてはゐるが、共に日本人の觀念及び習慣とは全く相容れないものがある。即ち共に其國を守るといふ點に於て一致して居る。彼等はシカゴ市民否合衆國民としての共通氣分を有して居るわけである。

カルチュアアを分析定義することは困難である。前に述べたカルチュアアの意義を再び示せば、カルチュアアとは單に信念、習慣、貨物及びサーピスの集りをいふのではない、此等のもが第一義的には互にある一般的觀點に於て相倚り、第二義的には此等が相互に相倚り結合したものをいふ。換言すれば一の組織体である。カルチュアアは生命を有するもの

ではないが人體の如く一の組織を有するが故に其れに存する各別の要素を研究するのみにては眞のカルチュアアは了解出來ない。其の根底に存する一般的觀念を捕へねばならぬ。

他國民の生活様式了解の困難

他國民のカルチュアア及其れに附隨する消費は單に地理的環境、肉體的傳統、社會的接觸、工藝美術の狀態等の研究によつて了解することは困難である。例へば支那のカルチュアアは單に茶、硬玉、米、紙、提燈、上海紡績工場、美術等を單に寄せ集めたものではない故に、此等の分析的研究文では眞の支那の生活様式は分らない。或る國の人が他國に行き其國のカルチュアアを了解し得ないのは單に其態度、体裁、言葉等の皮相的相異のみに依るものではなく、他國民の生活様式了解の困難なる爲であると論じて居る。

生活標準

カルチュアアの内には存する生活標準は自らグループを造らんとする傾向があるといひ農夫、鑛夫、官吏、大學教授等相異なる職業的グループの生活標準に付き述べ、尙又異なる國民性若くは人種的グループの生活標準にも及んでゐる。尙

収入の高によるグループの生活標準等多くの生活標準のあることを説明し、カルチュア一の異なるに従ひ各異なる生活標準のあることを説いて居る。

生活標準の意義 (Scale of Living と Standard of Living)

Scale of living とは消費物にして封度、碼、カロリー、弗等の單位により確定的に測定され得る物をいひ standard of living とは消費されたる物質以上のもので物質でなく満足合計である。故に貧者の scale of living が富者のそれよりも低くとも其 standard of living は高きことがある。scale of living は明に相互に比較され得るも standard of living は然らず消費せる金高により其生活の良否、其れにより受くる満足といふものは知り得ない。同一物より受くる快樂の程度、種類は各人々により異なり且つ同一物の利用法も夫々異なる。従て生活標準の研究に當つてもそれが購買満足のみならず労働を通して現れることを注意せねばならぬ。然らば如何なる方法に於て生活標準は確めらるべきか、これに付最も費用のかからぬ方法として表式法を擧げてゐる。

して居る。實際に國民間に起る所のものにしての事實を調査吟味すれば、第一にあらゆるカルチュア一を支配する觀念は其カルチュア一内に於ける人口の増加に一般的關係を有する。

第二に多くの場合に於て一カルチュア一内に於ける異なる國民又は一國民内に於ける異なるグループの有する生活標準は又其の人口増加に對し、皮相的な影響を及すものであると。

かくてカルチュア一が人口の増加に對する一般的關係を有すること及び生活標準がそれに對し皮相的的關係を有するといふことを數多のカルチュア一に付き論じて居る。

人口と生活標準の下降

國民的出生率の減少はとりもなほさず人間の智能及先見力の増加を意味するものであるから喜ぶべき現象であると速断するものがあるが、然しこの減少も程度問題であつて或點迄の減少のみについて眞實なる言葉であるに過ぎない。高き生活標準が人口の増加を制限するせば低き標準も又制限するものである。我々自身のカルチュア一内に於ては社會的及經

人口問題

消費の全量は生産の如何によると同時に一個人の利用し得べき量は人口の如何にもよるもので人口と物資との關係は極めて重大なる問題であることを力説して居る。若しも人口が食物の供給と比例して増加したとすれば食糧に關する範圍内に於ての生産技術に於て實際的又可能的進歩をなしても何等個人の受くべき満足を増加しない。

人口制限

人口の増減を支配する法則は動物界のそれとは異なる。歴史によれば人口は生活法の進歩と共に増加するといふ一般法則は成立しない。物質的生活標準は開闢以來上昇しつつあつた、生産方法の増大したのは産業革命時代である。英國否歐洲に於ては人口が急激に増加し現今に至る迄増加し續けた。人口の増加は一部は出生率の上昇により一部は死亡率の減少による。人口の増加は全消費の増加と必ずしも平行するものではない。

次にマルサスの人口論を擧げ、これが結局狹義に解する時は誤れる論であり、廣く寛大に解すれば當れる論であると評することは優越を意味するや否やの問題は六ヶ敷しい。

産兒制限の可否

産兒制限を加ふることにより生活標準を高めることが出来るかといふ問題を擧げ著者は之を否定して居る。生活標準が急激に高まり人口が其の標準に適合しない様な國に於ては産兒制限の知識は一時的に効を奏するかも知れないが、其の他の状態の下に於ては決して効を奏せぬことであると云つて居る。又産兒制限法の知識が廣く普及し始めた時と其欲求の擴大した時とが合致したことは由々敷問題であると述べ、最後に亞米利加の例を引き産兒制限は法律により禁止せられて居ると述べて居る。

尙彼は更に豫算生活即計畫的消費の必要を説き消費の改善を述べて居るが、尙文明を測定するものはイタリーのアルフレッドニセロ教授の云へるが如く諸般の統計でなければならず、石炭消費量、砂糖、コーヒー、アルコールの如き贅澤品の消費量、食糧品の消費量、自殺率、富の増加、人口の増加、犯罪に關する統計に依つて所謂文明の發展が明に判明するな

どと云つて居る事は統計關係者から見れば頗る快心の事である。
(故マツタニ生)

東京消息

鈴木統計課長 宮下囑託
地方統計事務視察の爲昭和六年三月八日 鳥取、島根、
廣島、香川、愛媛の各縣に出張、同二十日歸京
長澤統計官
千葉縣統計講習會講演の爲昭和六年三月三日出張
同八日歸京
永井統計官
兵庫縣統計講習會講演の爲昭和六年三月九日出張
同十八日歸京
田中 屬
昭和五年十二月十九日佐賀縣統計主事に轉任
三月 十六日 商工省統計官 風早義確氏休職
三月二十五日 商工事務官從六位 楠瀬常猪氏商工省統計
官に就任せらる

内閣統計局事務擔任異動

野々村享氏 (内閣統計局書記官) 統計局審査課長に(六・四・一)
水谷良一氏 (〃) 統計局労働課長に(〃)
森 數 樹氏 (内閣統計局統計官) 統計局第一製表課長に(〃)
松田泰二郎氏 (〃) 統計局第二製表課長に(〃)
草山親義氏 (〃) 統計局庶務課勤務に(〃)
中山友長氏 (〃) 統計局人口課兼務に(〃)
藤田友作氏 (〃) 統計局第一製表課兼務に(〃)
高平威雄氏 (〃) 統計局第二製表課勤務に(〃)
上條 勇氏 (〃) 統計局労働課兼務に(〃)

地方消息

○地方統計主事異動
新任せられたる諸氏
田中利作君(農林屬)佐賀縣統計主事に(五・三・一九)
村上 英君(福岡縣統計主事補) 福岡縣統計主事に(六・二・二八)

廣瀬千代松君(福井縣屬)福井縣統計主事に(六・三・三三)
島田正沃君(高知縣屬)高知縣統計主事に(六・三・三三)
皆川昌三君(廣島縣屬)廣島縣統計主事に(六・四・二〇)
退職せられたる諸氏
中村芳貞君(東京府統計主事)
但地方事務官に任ぜられ東京府會計課長となられた
(六・二・二六)

石井秀彦君(福井縣統計主事) (六・二・二六)
大川英太郎君(福岡縣統計主事) (六・二・二六)
野澤清次君(香川縣統計主事) (六・三・三三)
堤德三郎君(廣島縣統計事務囑託) (六・四・一〇)
休職を命ぜられたる諸氏
小林繁松君(山梨縣統計主事) (六・一・三三)

○地方統計功勞者表彰
群馬縣に於ては昭和六年二月十一日第三回統計功勞者表彰
式を舉行したが表彰者左の通り
群馬縣多野郡吉井町書記 武者鶴一郎
同 確永郡豐岡村書記 浦野由三
同 佐波郡赤堀村書記 中島豐司

寄贈圖書 (昭和六年一月—三月)

刊行所	名 稱
農 務 局	昭和四年小作年報
同	産業組合概況
山 林 局	林野現業員共済組合同事業成績
同	昭和四年度蠶業取締事務成績
蠶 絲 局	國勢調査速報(失業・人口)
内閣統計局	會社統計表
同	卸賣物價調査月報
同	小賣物價調査月報
同	貨銀統計月報
同	重要生産月報
同	絹織物月報
同	絹織物及人造絹織物月報

秋田の林業(一月、二月)
 下野山林會報(一月)
 山林時報(一月、三月)
 山林會報(一月)
 帝水(二月、三月)
 水産の房總(二月)
 防長の水産(二月、三月)
 愛媛水産(一月)
 水産會報(二月)

定期刊行物

刊行所 名稱
 大阪商科大学 經濟時報(一月、三月)
 東洋經濟新報社 東洋經濟新報(一月—三月)
 野村證券株式會社調查部 財界研究(一月、三月)
 經濟タイムス社 經濟タイムス(二月、三月)
 協調會 社會政策時報(一月、三月)
 産業組合中央會 産業組合(二月)
 産業組合中央金庫金融研究會 組合金融(一月、二月)
 大日本蠶絲會 蠶絲界報(一月、二月)
 蠶業新報社 蠶業新報(二月、三月)
 中央報德會 斯民(二月、三月)
 蠶絲業同業組合中央會 中央蠶絲報(二月)

東亞同文書院 支那研究(一月)
 經濟情報社 經濟情報(二月)
 日本行政學會 官界(二月)
 東京統計協會 統計集誌(一月、三月)
 岩手縣統計協會 統計界(一月—三月)
 柳澤統計研究所 柳澤統計研究所報(秋冬號)
 千葉縣統計協會 統計(二月)
 三重縣統計協會 三重之統計(二月、三月)
 內閣統計局 統計時報(昭和五年九月)
 臺北帝大專門部 シルビア(三月)
 大阪商工會議所 月報(一月、三月)
 英文通信社 フイナンシャル・
 エコノミックス(十二月)
 東京商工會議所 商工月報(二月、三月)
 大連商工會議所 大連商工月報(二月、三月)
 大阪堂島取引所 堂島米報(一月)
 大阪商工會議所 月報(一月)
 高知商工會議所 月報(一月)
 岐阜商工會議所 岐阜商工月報(一月)
 敦賀商工會議所 敦賀商工月報(一月)
 宇治山田商工會議所 宇治山田商工月報(二月、三月)
 鐵道省運輸局 貨物情報(一月)
 文部省會計課 經理資料(二月)

農務局 米穀時報(一月、二月)
 山林局 山林業報(二月)

刊行所 名稱
 大原社會問題研究所 日本勞働年鑑
 三重高等農林學校 學勢叢報
 東京市統計課 スポーツ統計(大相撲春場所)

銚鐵同業組合 銚鐵關稅引上の急務
 札幌鐵道局 産額より見たる北海道の主要物産
 札幌稅務監督局 同局案内圖
 宮城縣農會 改善しつゝある農會經營、農業經營と
 鈴木農林省統計課長 生活改善、宮城縣農事に關する調査
 東京商工會議所 國産愛用の意義
 珠算能力檢定及競技會開催に就て

歐文雜誌及印刷物

刊行所 名稱
 American Farm Economic Association Journal of Farm Economics
 American Statistical Association Journal of The American Statistical Association

Harvard Economic Society The Review of Economic Statistics
 The Statist Statist (January, February)
 Clark University, U. S. A. Economic Geography
 United States Tariff Commission Fourteenth Annual Report, 1930
 United States Department of Agriculture Wheat Futures (January)
 American Statistical Association Handbook of The American Statistical Association (January)
 Canada, Dominion Bureau of Statistics Agricultural Statistics By Provinces, Counties and Crop Districts (January)
 Prices and Price Indexes (January, February)
 Monthly Bulletin of Agricultural Statistics
 The Canadian Patent Office The Canadian Patent Office Record (March)
 England, Ministry of Agriculture & Fisheries Agricultural Statistics, (February, 1929)
 New Zealand, Department of Agriculture Journal of Agriculture, (1931)

主要農産物生産状況

米				大 麥			
年 次	作付面積	收 穫 高		作付面積	收 穫 高		
		數 量	價 額		數 量	價 額	
大正10	3,134,894.9	55,180,468	2,018,362,196	528,930.3	9,028,075	82,766,511	
11	3,140,766.9	60,693,851	1,621,214,257	505,615.2	8,771,948	80,164,620	
12	3,147,561.4	55,444,089	1,771,690,626	477,808.3	7,595,296	63,569,897	
13	3,142,514.4	57,170,413	2,214,429,026	459,099.4	8,075,776	83,138,523	
14	3,153,837.7	59,704,286	2,133,767,667	456,789.2	8,829,039	108,730,264	
昭和 1	3,158,271.2	55,592,820	1,836,221,505	447,544.7	8,568,853	83,520,117	
2	3,173,683.5	62,102,541	1,764,337,385	425,520.0	7,569,197	65,341,873	
3	3,191,736.1	60,303,089	1,633,008,619	403,723.5	7,605,616	67,789,880	
4	3,210,604.1	59,552,053	1,584,575,011	394,469.6	7,116,763	66,653,717	
5	3,239,307.0	66,873,189	1,117,916,180	330,467.3	7,090,875	50,398,856	

小 麥				稈 麥			
年 次	作付面積	收 穫 高		作付面積	收 穫 高		
		數 量	價 額		數 量	價 額	
大正10	515,647.5	5,582,200	89,207,909	666,241.8	7,053,681	91,232,114	
11	501,404.3	5,726,622	88,281,698	614,872.4	7,131,753	91,974,279	
12	487,864.7	5,190,619	74,344,166	562,422.5	5,856,154	75,867,548	
13	469,041.2	5,268,158	78,736,954	544,099.7	5,738,982	93,624,350	
14	468,815.3	6,121,441	114,762,622	549,792.0	7,778,701	133,700,724	
昭和 1	467,571.1	5,897,260	103,579,534	544,513.8	7,440,506	101,224,422	
2	473,742.0	6,056,595	100,333,302	530,660.1	7,313,902	94,342,659	
3	489,965.7	6,389,114	100,112,100	510,961.1	7,126,035	94,561,837	
4	494,968.1	6,323,516	96,796,739	501,040.5	7,323,059	95,055,300	
5	491,456.3	6,125,013	75,295,154	482,790.2	6,088,217	64,843,312	

繭				生 絲			
年 次	養蠶戸數	收 繭 高		製絲場數	生 産 高		
		數 量	價 額		數 量	價 額	
大正10	1,802,543	63,327,800	409,777,401	239,828	6,238,796	595,296,219	
11	1,785,079	60,560,951	573,135,123	207,738	6,397,704	717,106,204	
12	1,862,063	69,539,746	660,403,820	203,672	6,756,040	795,944,563	
13	1,890,166	73,818,442	551,679,672	196,920	7,577,170	837,230,677	
14	1,948,706	84,799,796	824,255,696	185,149	8,284,317	956,052,187	
昭和 1	2,061,587	86,725,501	661,453,536	91,751	9,101,310	856,751,982	
2	2,103,508	90,862,559	496,932,514	83,469	9,880,306	798,798,455	
3	2,165,265	93,849,090	551,679,133	76,090	10,584,232	835,467,904	
4	2,216,602	102,093,430	655,001,070	69,407	11,292,399	857,577,692	
5	2,215,052	106,463,516	304,212,774	

(備考) 養蠶戸數ハ其ノ季節ニ於テ養蠶ニ従事シタル戸數トス。尙春夏秋各季ノ養蠶ヲ行フモノト雖モ一戸トシ重複セザル様計算シタルモノナリ。
製絲場數ハ其ノ年ニ於テ作業ヲ爲シタル場數。
昭和元年以降ノ生絲生産高中ニハ自家用ノモノヲ含マズ。

France, Ministère du Commerce et de l'Industrie
 Deutschland, Dr. Ludwig Kister
 Statistisches Reichsamt
 Italy, International Institute of Agriculture
 Monteur Officiel du Commerce et de l'Industrie
 Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik
 Wirtschaft und Statistik
 The International Review of Agriculture
 Italy, International Institute of Agriculture
 Monthly Crop Report and Agricultural Statistics (January)
 Monthly Bulletin of Agricultural Science and Practice
 Monthly Bulletin of Agricultural Economics and Sociology

主要農産物卸賣物價 (續)

	臺灣 玄 米 (百斤)						大 麥 (一石)					
	東 京	大 阪	神 戶	京 都	名 古 屋	横 濱	東 京	大 阪	神 戶	京 都	名 古 屋	横 濱
大正 9年 平均	—	—	※ 10.18	—	—	—	15.75	15.77	※ 12.17	※ 11.98	15.30	※ 11.13
10	—	—	8.27	—	—	—	10.21	10.82	11.01	11.61	10.51	9.46
11	—	—	7.52	—	—	—	9.05	10.01	10.36	10.32	9.08	8.64
12	—	—	7.90	—	—	—	9.50	11.04	11.01	12.12	9.36	※ 9.27
13	—	—	9.79	—	—	—	12.06	14.10	13.08	14.27	12.82	11.98
14	—	—	11.65	—	—	—	13.19	13.98	14.57	15.28	14.11	13.34
昭和 1	—	—	10.61	—	—	—	9.80	10.54	11.28	11.19	10.25	9.96
2	—	—	8.91	—	—	—	8.63	9.05	※ 10.12	9.53	8.50	9.23
3	—	—	9.20	—	—	—	11.55	11.69	11.10	12.21	11.18	11.15
4	—	—	9.02	—	—	—	11.58	10.61	—	11.34	11.07	11.00
年 月												
4 1	—	—	9.12	—	—	—	12.55	12.00	—	12.65	12.78	11.75
2	—	—	8.92	—	—	—	12.79	12.10	—	13.00	12.24	11.55
3	—	—	9.02	—	—	—	13.17	12.00	—	12.80	12.18	11.65
4	—	—	9.50	—	—	—	12.75	11.40	—	12.20	11.82	11.70
5	—	—	9.19	—	—	—	11.57	11.00	—	11.71	11.61	11.20
6	—	—	9.40	—	—	—	11.14	10.00	—	10.75	10.40	11.20
7	—	—	8.20	—	—	—	10.30	9.10	—	9.88	9.62	10.50
8	—	—	8.74	—	—	—	10.58	9.70	—	10.50	9.85	10.30
9	—	—	8.69	—	—	—	10.61	9.67	—	10.44	10.04	10.60
10	—	—	9.37	—	—	—	11.11	9.90	—	10.40	10.51	10.60
11	—	—	9.14	—	—	—	11.10	10.30	—	11.00	10.94	10.60
12	—	—	8.97	—	—	—	11.24	10.10	—	10.70	10.81	10.40
昭和 5年 平均	7.46	8.00	7.33	—	7.54	7.39	8.65	8.50	—	8.92	8.15	8.40
1 1	8.40	10.73	8.25	—	8.40	8.70	11.16	10.10	—	10.64	10.59	10.40
2	8.54	10.80	8.39	—	8.63	8.60	11.59	10.70	—	11.11	10.68	11.00
3	8.52	—	8.38	—	8.42	8.40	11.04	10.10	—	11.31	10.39	10.70
4	8.56	—	8.47	—	8.52	8.65	9.46	9.45	—	10.52	9.59	9.40
5	8.64	—	8.58	—	8.74	8.70	9.03	8.65	—	9.56	8.89	8.95
6	8.18	8.87	8.13	—	8.51	7.70	7.49	8.10	—	8.40	7.51	7.30
7	7.74	8.66	7.52	—	7.62	7.55	8.23	7.75	—	7.95	7.24	7.40
8	7.77	8.40	7.68	—	7.59	7.70	8.18	8.30	—	8.36	7.50	8.10
9	6.79	7.80	6.69	—	7.07	6.40	7.51	7.85	—	7.98	7.24	7.30
10	5.34	5.66	5.15	—	5.84	5.40	6.21	7.00	—	7.06	6.05	6.35
11	5.57	5.62	5.19	—	5.73	5.55	6.76	7.05	—	6.91	5.92	6.80
12	5.32	5.48	5.50	—	5.40	5.35	7.11	6.90	—	7.18	6.21	7.10

八七

(備考) 昭和三年ノ大麥、神戸市場ノ数字ハ最初ノ二ヶ月ノミノ平均價額デアル。

主要農産物卸賣物價 (商工省卸賣物價統計=據ル)

	内地 玄 米 (一石)						朝 鮮 玄 米 (一石)					
	東 京	大 阪	神 戶	京 都	名 古 屋	横 濱	東 京	大 阪	神 戶	京 都	名 古 屋	横 濱
大正 9年 平均	44.63	45.29	※ 39.33	※ 38.96	43.39	36.66	—	34.37	—	—	—	—
10	30.79	31.21	31.83	31.58	30.82	33.14	—	27.03	—	—	—	—
11	35.14	36.59	36.63	36.10	32.19	36.51	—	31.59	—	—	—	—
12	32.76	32.92	33.37	33.38	31.95	33.09	—	29.33	—	—	—	—
13	38.58	39.73	39.71	40.13	38.27	38.52	—	35.35	—	—	—	—
14	41.65	42.44	42.75	43.13	41.48	41.02	—	38.89	—	—	—	—
昭和 1	37.36	39.05	38.89	39.19	37.80	36.77	—	35.54	—	—	—	—
2	35.43	36.96	36.29	36.12	35.51	35.08	—	32.10	—	—	—	—
3	31.36	31.61	30.52	31.00	29.97	30.63	—	28.60	—	—	—	—
4	29.33	30.32	30.42	30.67	29.28	29.34	—	28.81	—	—	—	—
年 月												
昭和 4 1	28.78	30.30	29.83	29.88	28.13	28.35	—	27.10	—	—	—	—
2	29.33	30.33	29.50	29.60	28.11	28.70	—	26.83	—	—	—	—
3	29.32	30.33	29.48	29.56	28.35	28.55	—	26.93	—	—	—	—
4	29.57	30.50	29.83	29.86	28.33	29.30	—	26.73	—	—	—	—
5	29.45	30.73	30.13	29.81	28.53	29.50	—	27.13	—	—	—	—
6	29.54	30.83	30.78	30.44	29.00	30.25	—	27.97	—	—	—	—
7	28.53	29.77	29.96	29.65	28.05	29.25	—	27.27	—	—	—	—
8	29.05	31.07	30.10	30.99	28.60	29.75	—	28.77	—	—	—	—
9	29.01	31.27	30.39	30.99	29.53	30.05	—	29.57	—	—	—	—
10	31.32	32.90	33.04	34.23	33.44	30.75	—	31.73	—	—	—	—
11	29.84	32.10	31.56	33.31	32.92	30.00	—	29.00	—	—	—	—
12	28.21	29.67	30.46	29.73	28.39	26.40	—	26.70	—	—	—	—
昭和 5年 平均	25.89	27.07	26.67	26.45	25.33	24.83	24.65	24.80	24.67	24.84	24.94	24.84
年 月												
1	27.42	28.17	28.43	28.11	27.23	27.00	26.68	26.03	26.43	27.60	27.15	26.40
2	27.61	28.30	28.58	28.24	27.83	26.50	27.31	26.10	26.59	27.67	27.21	27.55
3	27.36	28.25	28.37	27.91	27.19	26.00	27.26	25.93	26.27	26.57	27.29	26.55
4	27.10	28.02	27.90	27.65	26.79	25.75	27.17	25.65	25.76	26.28	26.79	26.65
5	27.31	28.28	28.33	27.89	26.59	26.15	27.23	26.27	26.22	26.45	26.28	26.75
6	27.58	28.75	28.50	27.99	26.66	26.15	27.20	26.57	26.33	26.70	26.51	26.40
7	29.47	29.53	29.14	28.64	27.96	28.50	27.73	27.55	26.99	27.14	27.82	27.50
8	30.94	31.00	29.95	30.40	29.29	29.25	28.20	28.95	28.05	28.53	28.95	27.75
9	29.28	29.12	29.13	28.83	27.04	25.80	26.67	27.09	26.95	26.41	26.64	26.00
10	19.84	23.90	22.67	21.97	19.97	20.25	17.22	21.34	19.58	19.42	19.47	20.00
11	18.23	22.10	20.08	20.56	18.99	18.45	15.71	19.43	19.44	17.32	18.38	18.50
12	18.55	19.37	19.01	19.22	18.39	18.20	17.40	16.65	17.28	17.94	16.83	18.00

(註) 内地玄米ハ中等品ニ依ル

※ 下半年平均

※※ 上半年平均

八六

米及生絲ノ相場表

年 月	米		生 絲	
	東京深川 (石建)		横濱現物 (百斤建)	
平均	円		円	
大正 2年	21.39		890	
14年	41.64		1,957	
昭和 1年	37.79		1,585	
2年	35.43		1,375	
3年	30.85		1,321	
4年	29.07		1,315	
昭和 4年 1月	28.20		1,356	
2月	28.62		1,378	
3月	28.98		1,396	
4月	28.48		1,401	
5月	29.31		1,341	
6月	29.50		1,314	
7月	28.52		1,282	
8月	28.93		1,302	
9月	29.11		1,330	
10月	31.16		1,288	
11月	29.19		1,221	
12月	27.85		1,169	
昭和 5年平均	25.60		865	
1月	26.99		1,174	
2月	27.34		1,169	
3月	27.32		1,165	
4月	27.12		1,139	
5月	27.34		1,100	
6月	27.38		795	
7月	29.18		705	
8月	30.53		708	
9月	28.70		648	
10月	19.13		574	
11月	18.13		581	
12月	18.04		625	
昭和 6年 1月	17.65		708	
2月	17.68		684	
3月	18.00		666	
4月	18.21		597	

(備考) 大蔵省金融事項参考書ニ據ル。

主要農産物卸賣物價 (續)

	稈 麥 (一石)						小 麥 (百斤)					
	東 京	大 阪	神 戸	京 都	名 古 屋	横 濱	東 京	大 阪	神 戸	京 都	名 古 屋	横 濱
大正 9年平均	28.58	25.81	19.45	18.91	23.13	20.64	21.94	23.13	18.56	19.84	22.97	17.48
10	16.12	15.12	14.95	15.96	14.64	14.24	19.36	20.25	19.06	20.37	19.57	18.84
11	15.35	13.33	13.70	13.84	12.99	13.01	17.04	18.47	17.95	18.41	17.57	16.84
12	15.57	14.55	15.44	15.47	14.93	12.72	16.84	18.06	17.18	18.26	17.24	17.39
13	21.23	20.31	21.21	21.24	19.37	17.43	18.80	20.42	19.68	21.25	19.16	18.11
14	23.21	21.63	22.94	22.11	20.76	19.51	23.51	25.35	25.09	24.97	23.83	21.98
昭和 1	16.75	14.72	15.51	16.26	14.84	14.51	20.45	21.87	21.57	21.32	20.76	19.91
2	15.30	13.74	14.58	15.37	13.00	13.74	18.12	19.61	19.43	17.94	19.18	18.05
3	18.20	16.61	18.14	17.42	15.50	16.20	18.06	19.60	19.38	17.96	19.06	17.61
4	17.64	15.37	17.43	16.64	15.01	17.07	17.68	18.69	18.49	16.60	18.43	17.33
5	19.67	18.00	19.60	18.50	17.03	17.00	17.40	19.10	19.00	17.00	19.09	17.00
6	19.82	17.80	19.30	18.50	16.41	16.60	17.96	19.55	19.38	17.00	19.28	16.40
7	19.88	17.50	18.89	18.35	16.25	16.55	18.07	19.10	18.93	17.00	19.01	17.25
8	19.02	16.50	18.07	17.75	16.01	17.50	17.87	18.80	18.60	16.50	18.52	17.15
9	17.96	16.00	18.04	17.00	15.72	16.85	16.86	18.00	17.80	16.20	18.08	16.60
10	16.78	14.00	17.92	16.75	14.49	15.95	16.44	17.50	16.85	16.10	17.11	16.20
11	15.02	12.67	14.81	14.77	13.34	15.45	17.28	17.72	18.00	15.83	18.01	17.75
12	15.78	13.47	15.21	15.00	13.48	14.60	18.44	19.03	18.80	16.63	18.73	18.65
昭和 5年平均	16.06	13.83	15.56	15.01	13.77	15.50	18.22	18.83	18.60	16.20	18.43	18.00
1	16.98	14.50	17.04	15.68	14.74	15.75	17.93	18.90	18.60	16.68	18.12	17.60
2	17.32	15.45	17.60	16.50	15.15	15.75	17.73	18.95	18.68	17.00	18.30	17.75
3	17.35	14.70	17.12	15.88	14.73	15.38	18.00	18.85	18.63	17.00	18.44	17.55
4	14.37	11.79	13.69	13.32	11.74	12.48	6.05	6.11	6.04	5.40	5.09	5.87
5	17.29	14.50	16.66	15.34	14.17	15.38	7.56	7.52	7.47	6.71	7.36	7.47
6	17.85	14.80	17.05	16.00	14.17	15.40	7.37	7.44	7.45	6.68	7.22	7.15
7	17.26	14.15	16.32	15.73	14.14	15.70	7.13	7.08	7.05	6.62	6.78	7.11
8	15.97	13.40	15.38	15.22	13.56	14.30	7.08	6.98	7.00	6.18	6.79	6.81
9	15.08	11.70	13.72	14.19	12.08	13.15	6.63	7.03	7.03	6.00	6.50	6.51
10	13.33	10.90	12.84	12.10	10.70	11.50	5.95	6.32	6.07	4.89	5.80	5.70
11	13.36	10.90	12.85	12.32	10.88	11.75	5.57	5.60	5.48	4.72	5.47	5.40
12	13.66	11.30	13.31	13.20	11.44	12.00	5.74	5.58	5.58	5.10	5.60	5.70
昭和 6年平均	12.92	10.70	12.74	12.80	11.19	11.20	5.32	5.32	5.24	4.83	5.18	5.23
1	11.41	9.50	10.90	11.30	9.74	10.10	4.69	4.84	4.65	4.49	4.63	4.32
2	12.01	9.95	11.33	10.81	9.37	9.30	4.86	4.84	4.77	4.34	4.92	4.38
3	12.40	9.60	11.19	10.77	9.44	10.00	4.78	4.80	4.70	4.28	4.87	4.68

生絲月末在荷高 (單位綑)

年 月	横 濱	神 戸	計
大正12年	60,786	6,006	66,792
13年	45,566½	5,100	50,666½
14年	51,425	6,267½	57,692½
昭和 1年	67,670½	7,936	75,606½
2年	69,058½	11,614½	80,673
3年	49,465	13,343	62,808
4年 1月	31,532	14,380½	45,912½
2月	21,120	10,455	31,574
3月	30,591	12,063	42,654
4月	34,202	11,626	45,828
5月	30,998½	9,695	40,693½
6月	20,634	7,696	28,330
7月	40,655	11,973	52,628
8月	35,233½	9,671	44,904½
9月	44,360	13,858	58,218
10月	48,822	14,416	63,238
11月	65,109	18,422	83,537
12月	75,034½	20,711	96,105½
昭和 5年 1月	57,533	20,184	77,712
2月	63,575½	19,497	83,072½
3月	92,755	25,983	118,541
4月	130,060	35,867	165,927
5月	169,484½	50,207	219,691½
6月	175,495½	59,568	235,063½
7月	183,096	67,624	250,720
8月	178,288	66,428	244,716
9月	180,691	66,234	246,925
10月	176,295½	62,655	238,950½
11月	177,824	62,804	240,628
12月	176,424½	62,260	238,684½
昭和 6年 1月	172,862½	62,396	235,258½
2月	180,242	64,512	244,754
3月	163,041	60,800	223,841
4月	176,096	64,263	240,359

備考 本表ハ横濱蠶絲貿易商同業組合ノ調査ニ據ル、玉絲ヲ含マズ。
自大正十二年至昭和三年迄ハ十二月末現在ノ數字トス。

内地在米高 (單位石)

年 次	内地米	朝鮮米	臺灣米	外國米	計	府 所 有 米
(1) 五 月 一 日 現 在						
大正10年	32,940,686	434,838	33,725	788,160	34,197,409	497,405
11年	29,772,968	754,610	273,232	1,968,668	32,769,478	729,792
12年	31,396,217	591,497	170,547	502,912	32,661,173	881,189
13年	27,457,278	1,091,527	137,615	609,621	29,296,041	574,603
14年	27,207,346	580,533	165,051	1,499,274	29,452,204	1,361,327
昭和 1年	29,016,893	619,683	111,865	1,275,107	31,023,548	1,308,549
2年	27,414,826	961,779	117,298	1,443,971	29,937,874	1,377,916
3年	32,154,926	650,083	168,351	614,967	33,588,327	2,551,772
4年	32,010,357	872,030	139,013	217,758	33,239,158	2,722,515
5年	27,763,509	588,254	90,849	161,586	28,604,198	3,273,637
6年	30,822,198	747,078	106,491	74,405	31,750,172	4,302,472
(2) 七 月 一 日 現 在						
大正10年	23,077,998	390,215	25,858	779,355	24,273,426	532,161
11年	20,964,977	418,660	137,882	1,492,143	23,013,662	677,847
12年	21,934,812	672,851	85,073	512,325	23,025,061	794,335
13年	18,392,252	824,395	71,931	1,103,594	20,392,172	848,501
14年	18,058,342	478,313	87,026	1,821,554	20,445,735	1,358,677
昭和 1年	19,557,744	353,731	89,136	1,469,400	21,470,011	1,303,089
2年	18,471,423	697,249	83,325	1,522,725	20,774,722	1,375,639
3年	22,472,673	468,817	86,279	535,406	23,563,175	2,525,596
4年	22,717,265	619,793	108,370	222,933	23,668,361	3,432,040
5年	21,217,461	401,741	85,595	147,765	21,852,562	3,253,959
(3) 十 一 月 一 日 現 在						
大正10年	7,040,279	211,645	260,918	648,449	8,161,291	726,003
11年	5,825,300	113,961	152,345	1,213,664	7,305,270	610,847
12年	5,470,432	148,741	174,274	996,403	6,789,850	695,655
13年	3,526,799	116,680	129,449	1,434,306	5,210,234	1,351,594
14年	3,605,165	143,397	134,653	1,616,516	5,500,031	962,828
昭和 1年	4,497,432	130,269	108,909	1,231,161	5,967,771	1,285,781
2年	4,296,986	216,030	143,499	1,109,026	5,765,541	1,584,670
3年	7,142,581	286,914	112,187	298,510	7,840,192	2,473,593
4年	6,712,201	109,419	89,334	116,603	7,027,557	3,322,592
5年	5,444,698	122,780	35,466	114,173	5,717,117	2,210,287

(備考) 1、本表ハ農林省農務局ノ調査ニ係リ各道府縣ノ報告ニ政府所有
米ヲ加ヘタルモノナリ。
2、十一月一日現在ノ内地米在高ノ中ニハ其ノ年生産シタル新米
ハ之ヲ含マス。

高 産 生
主 要 ケ ル 於 ニ 世 界

國 名	1909—1913 (平均)		1928—29		1929—30	
	作付面積	收穫高	作付面積	收穫高	作付面積	收穫高
米						
	1,000ヘクタール	1,000キントナル	1,000ヘクタール	1,000キントナル	1,000ヘクタール	1,000キントナル
亞 細 亞 洲	46,646	747,016	52,715	825,609	51,623	806,679
日 本	2,954	90,875	3,165	109,051	3,184	108,006
朝 鮮	1,176	18,413	1,505	24,434	1,619	24,778
臺 灣	478	8,181	586	12,228	568	11,720
英領印度 ⁽¹¹⁾	31,991	486,331	33,597	(11) 502,867	(11) 32,336	(11) 482,698
英領馬來	237	2,402	278	3,120
英領北ボルネオ島 ⁽⁶⁾	24	201	29	298	31	338
セイロン島	281	2,259	338	2,570	324	3,080
蘭領東印度	3,010	47,600	3,526	52,178	3,423	50,679
佛領印度	16	193	19	201	19	258
比律賓群島	1,114	8,201	1,775	21,906
暹 羅	1,831	28,499	2,386	39,132
歐 羅 巴 洲	196	6,911	205	9,606	210	10,153
ブルガリヤ	2	42	7	164	9	127
伊 太 利 亞	145	4,750	135	6,316	137	6,744
葡 萄 牙	9	193	12	199	14	224
西 班 牙	38	1,899	49	2,904	48	3,037
ソ 聯 邦	236	2,780
亞 米 利 加 洲	530	7,946	1,180	22,049	1,150	21,600
亞 爾 然 丁	5	61	3	63
伯 刺 西 爾	...	448	610	10,585
英領ギアナ	16	463	22	621	26	707
コロンビア	6	128	19	164
墨 西 哥	65	720	45	832
秘 魯	53	930 ⁽⁵⁾	35 ⁽⁵⁾	535
北米合衆國	290	4,852	395	8,826	361	8,209
亞 弗 利 加 洲	1,200	17,650	1,700	22,410	1,780	23,230
白耳義コンゴ ⁽³⁾	3	22	16	60
埃 及	104	3,736	107	3,377	(10) 125	(10) 4,037
マダガスカル	396	6,586	515	7,228	(10) 560	(10) 6,151
シラレヤン	100	1,950	162	2,740
太 洋 洲	8	317	12	317
フィジー諸島	4	172	5	137
布 哇	4	142	11	73
世界總計	48,810	782,600	56,050	884,232	55,000	866,200

(備考) (1) 面積欄ノ數字ハ收穫面積トス。(2) 總數ニ計上サレザル數字トス。モノ。(7) 白人種ノ經營スル農場ニ於ケル收穫面積。但シ收穫高ニハ字。(10) 夏季作物。(11) 大戰前ニアリテハ、調査範圍ハ印度ノ總米ビ自1926—27年至1929—30年ノ數字ハ夫々總數ノ99パーセントヲ占ズ。(14) 大麥トメスリン。

(注意) 英國トアルハグレートブリテン及北部愛蘭ヲ指ス

統 計
農 産 物 生 産 統 計 (萬國農事協會年報ニ據ル)

國 名	1909—1913 (平均)		1928 (*1928—29)		1929 (*1929—30)	
	作付面積	收穫高	作付面積	收穫高	作付面積	收穫高
小 麥						
	1,000ヘクタール	1,000キントナル	1,000ヘクタール	1,000キントナル	1,000ヘクタール	1,000キントナル
亞 細 亞 洲	12,526	140,094	13,946	90,325	13,880	97,610
日 本	477	6,432	486	8,386	491	8,300
朝 鮮	149	1,249	362	2,339	354	2,264
英領印度 ⁽¹¹⁾	11,826	95,756	13,028	79,160	12,954	86,435
歐 羅 巴 洲	29,340	370,530	28,868	383,190	28,133	389,154
佛 蘭 西	6,787	88,627	5,243	76,554	5,160	87,053
獨 逸	1,657	37,650	1,728	38,536	1,600	33,492
英 國	750	15,875	590	13,543	560	13,542
洪 牙 利	1,511	19,950	1,677	27,001	1,500	20,408
伊 太 利 亞	4,744	49,896	4,963	62,215	4,770	70,820
波 蘭	1,353	16,783	1,290	16,117	1,430	17,925
ルーマニア	1,852	23,893	3,206	31,446	2,737	27,418
西 班 牙	3,864	35,502	4,241	32,628	4,299	41,979
ソ 聯 邦	29,950	201,000	29,089	215,900	30,644	201,100
ユーゴスラビヤ	382	4,013	1,895	28,112	2,110	25,855
亞 米 利 加 洲	30,922	293,807	43,550	504,750	42,504	357,792
*亞 爾 然 丁	6,023	40,023 ⁽¹⁾	8,126 ⁽²⁾	(3) 93,651	(3) 6,500	(3) 37,404
加 奈 陀	4,025	53,648	9,761	154,240	10,220	81,517
*智 利	427	5,782	694	8,077	711	10,084
墨 西 哥	786	3,006	519	3,002	523	3,084
北米合衆國	19,060	187,820	23,582	248,996	24,743	219,499
*ウ ル ガ イ	320	1,774	508	4,141	448	3,648
亞 弗 利 加 洲	3,470	700	4,473	1,960	4,605	37,010
アルゼリア	1,425	9,569	1,479	8,247	1,536	9,065
埃 及	532	9,283	643	10,150	653	12,309
佛領モロコシ	(12) 628	(12) 5,077	(12) 1,078	(12) 7,637	(12) 1,218	(12) 8,645
チ ュ ニ ス	530	1,694	817	3,300	701	3,350
*南 阿 聯 邦	301	1,709	334	1,970	379	2,796
太 洋 洲	3,174	26,514	6,109	45,862	5,798	36,354
*濠 洲	3,077	24,630	6,005	43,458	5,703	4,422
*新 西 蘭	98	1,885	103	2,404	95	1,932
世界總計	109,382	1,028,245	126,035	1,271,987	125,564	1,119,020

(3) 不完全數。(4) 1926年—27年。(5) 1927—28年。(6) 白人種ノ栽培ニ依ル土人ノ收穫高ヲ含ム。(8) 英蘭、ウエールズニ於ケル收穫高。(9) 未訂正ノ數作付面積中86パーセントヲ占メ、尙ホ自1914—15年至1918—19年ノ數字及ムルモノトス。(12) 所得上ノ目的モテ調査サレタル數字。(13) 全國ヲ包含セ

世界ノ水産統計 (續)

國名	年次	従業人員	漁船數	投資額	漁獲高	
					數量	價額 (千圓)
瑞典	1927	22,000	16,430	...	175,000	7,250
其他ノ歐洲諸國	4,800
合衆國 (アラスカ等)	1928	126,910	84,381	...	2,912,377	112,724
同 (諸島)	15,800
ウーラガ	1925	18,300	550
ユーゴスラビア	1927	19,022	6,004	...	10,231	742
總計	29,459,711	941,683

- (備考) (1) 一九二八年ニ於ケル、ニューサウスウエールズノ漁獲高ハ 27,282,000 封度、價額 3,450,000 弗
- (2) 賣上高
- (3) 推計
- (4) 外國、主トシテ、グレートブリテンニ陸揚ノモノ 118,000,000 封度、價額 2,951,000 弗ヲ除ク
- (5) 貝類ヲ除ク
- (6) 漁具價額 24,600,000 弗
- (7) 鯨漁獲高 20,000,000 弗以上ヲ除ク
- (8) 漁船及ビ漁具ヘノ投資額 21,978,000 弗
- (9) 1926年、西海岸マドラスニ陸揚ノモノ 400,000,000 封度、價額 2,300,000 弗
- (注意) 貝殼、鯨ノ漁獲高ハ含マレザル場合多シ

世界ノ水産統計 (漁政局長代理ルイス・ラ
ドクリフ氏編、フイツシ
ンダ・ギヤゼット誌ヨリ)

國名	年次	従業人員	漁船數	投資額	漁獲高	
					數量	價額 (千圓)
南亞聯邦	1920	38,440	4,186
ルゼリア	1926	28,130	1,400
亞爾然丁	1928	52,603	1,575
濠洲 (1)	1928	6,000	76,417	12,000
白耳義	1927	33,000	1,480
加奈陀	1928	62,785	...	31,131,000	1,217,558	(2) 54,971
智利	1924	3,350	25,350	(3) 1,250
支那	3,100,000	(3) 15,000
玖馬	1929	20,031	2,800
チエツコスロヴァキア	1929	5,500	(3) 330
丁抹	1928	18,788	18,944	12,596,000	208,100	9,835
埃及	1927	104,561	(3) 10,000
イングランド及ウエールズ	1928	34,496	7,841	...	1,818,570	87,120
ファローエール諸島 (諸島)	1927	2,930	1,846	...	107,800	1,422
佛蘭西	1928	136,779	58,000	...	668,267	42,845
芬蘭	1927	30,800	1,531
領印度支那	1923	3) 551,150	(3) 11,023
獨逸	1928	4) 597,236	17,540
希臘	1923	5,875	3) 85,000	27,985
布哇	1926	1,010	...	800,000	10,000	(3) 1,000
和蘭	1927	45,300	9,353	...	493,800	13,465
水洲	1927	13,281	3,778	...	550,000	7,417
印度、セイロン、波野、土耳其 アラビア及ブルマ (9)	3) 2,000,000	20,000
愛蘭	1927	14,800	3,200	...	5) 80,000	4,500
伊太利	1916	78,631	3,372
日本	1925	1,115,000	361,239	(6)	5,700,000	176,000
フランス	1927	4,278	2,880	750,000	22,025	477
リニア	1925	13,614	693
マルタ諸島	1928	...	1,061	...	1,100	180
モロッコ	1928	2,582	496	...	15,000	2,500
ニューファンドランド	1926	650,000	17,000
新西蘭	1927	46,225	2,800
波蘭	1927	100,870	68,724	...	2,050,000	(7) 18,672
波蘭	1927	792	1,211	...	4,400	302
葡牙	1928	54,132	14,016	...	445,900	11,111
ルマニア	1924	50,486	27,820
露西亞	3) 1,206,000	(3) 50,000
蘇格蘭	1928	66,676	6,471	(8)	5) 821,320	25,212
セイセル (英領)	1925	600	350	...	1,560	61
暹羅	2,000,000	(3) 40,000
西比利亞 (東部)	1925	270,000	10,000
亞米利加 (南、中) 及西印度	3) 2,600,000	13,035
西班牙	1928	628,860	49,657
海峽植民地 (新嘉坡)	1925	15,000	(3) 300

正 誤 (農林統計時報第二號)

頁	段	欄	行	誤	正	頁	段	欄	行	誤	正
54	-	5	2	2,407,131	2,407,151	87	-	12	4	9.16	9.63
〃	-	6	12	26,368,748	26,638,748	88	-	4	8	14.53	14.48
55	-	4	28	1,286,555	1,286,675	〃	-	6	2	14.61	14.51
〃	-	6	23	22,351,773	22,351,763	〃	-	7	10	17.07	16.07
60	-	5	10	46,197	46,917	〃	-	欄外		註附記 昭和四年造ハ小産ノ 卸賣物價ハ右取在トス	
85	1	2	19	3,239,307.0	3,239,237.0	89	-	2	19	28.18	29.48
〃	〃	7	5	103,730,274	103,370,264	91	-	3	24	116,630	119,630
〃	2	2	3	437,864.7	437,864.8	91	-	2	21	92,755	92,575
〃	3	7	6	856,751,982	856,751,982	95	-	6	20	2,317	1,317
86	-	10	24	26.43	26.53	100	-	(2)ハ凡テ(r)トス			
87	-	2	35	5.32	5.53	103	-	6	16
〃	-	11	7	11.19	11.91	〃	-	7	〃

昭和六年三月二十三日印刷
昭和六年三月二十五日發行

編輯發行者 農林大臣官房統計課

東京府南葛飾郡南綾瀨町小菅二二八四

印刷者 竹田益平

東京府南葛飾郡南綾瀨町小菅二二八四

印刷所 小菅刑務所

品 賣 非
載 轉 禁 斷 無

終

